

探検・探査

8 号

2000 年 7 月

横浜市立大学 探検・探査の会

探検・探査の会 第8号

目 次

ボリビア隊の隊員諸君へ 幹事長 . . . 小森 享二 . . . 1

尾瀬リーダー冬季講習会 宮崎 捷二 . . . 3

ボリビア日本人移民100周年記念

アマゾン・マードレ・デ・ディオス川追跡調査報告から

探検隊全行程 6

インカトレッキング報告 8

インカトレッキングについて . . . 門間奈々 . . . 10

マードレ・デ・ディオス川下り 13

アマゾンの「カ」 本多 肇 . . . 17

ボリビア移住100周年記念取材報告

および南米アマゾン日誌 マカレナの森で (毎日新聞連載)

大槻英二 . . . 20

2000年・横浜市立大学探検探査の会総会 議事録 35

1999年度探検探査の会会計報告 36

会員近況紹介 37

編集後記 40

ボリビア隊の隊員諸君へ

幹事長 小森 享二

ボリビア隊は大きな成果を上げ無事帰還した。そして一連の活動の締めくくりである立派な報告書も作成された。ボリビア隊の隊員諸君にどのような言葉を投げかけたらいいのか少々戸惑いを覚えるが、「よく頑張ったね。お疲れ様。よかった。よかった。そして有り難う。」と言いたい。

確かボリビア隊が準備をし始める頃から例の横浜市立大学医学部付属病院での事故で横浜市大のイメージは相当ダウンしていたと思う。私達には直接関係ないものの、やはり気になる事件であった。それに引き換え、ボリビア隊の快挙は市大関係者にとって喜ばしい出来事であったに違いない。学長が最近の卒業式や入学式で探検部の活躍について言及していたということを聞いた。直接に責任はないものの市大病院のことがあっただけに学長もさぞボリビア隊の成功を喜んだことと思う。

OB としての私は久々の大掛かりな探検部あげての海外遠征ということで、遠征の成功を期待すると同時に無事帰還してくれることを切に願っていた。そして無事、遠征を終えて帰国したという知らせを聞いた時には本当に心底安心すると共に嬉しかった。大学を卒業してからは探検的活動からは遠ざかって久しい。現役の諸君がいろいろ計画して活動を推進しているのを知ると、ついつい自分の心までがわくわくして来る。ボリビア隊が遠征している間は今頃どのあたりで、何をしているのだろうか、全員無事で活動しているのだろうか、思いを巡らせていた。私はボリビア隊に大した援助はできなかったが、逆にボリビア隊から精神的に与えられたものが多くあるような気がする。そのような意味からも、これから多くの隊が編成されて皆の心をいろいろな所へ連れて行って欲しいものだ。

今回の遠征は 1998 年 4 月 19 日の「探検・探査の会」の総会において OB の穂積氏がプランを発表したことが発端であると記憶している。初めて、そのプランを聞いた時は探検部にとって初めての南アメリカ大陸というフィールドであるし、100 年前の日系移民のルートを辿るという企画もなかなかおもしろそうだったと思ったが、実現するのは経済的にも、安全確保の面からも相当難しいのではないかと感じた。しかし、現役の探検部員を中心に計画は着々と進められ、偵察隊の派遣を含めて、約 1 年半かけて所期の目的が達成された。今回の遠征に OB は隊員としては参加していないが、遠征の切っ掛けを作ったり、現地でのサポート、そして OB のジャーナリスト、大槻氏や佐藤氏による報道などで結構最後まで繋がりが継続された。現役部員と OB とがこのように協力関係を保ちながら探検活動を

推進していくやり方は今後の活動に大いに参考になると思う。

今回の遠征の成功要因は探検部の諸君が頑張ったことが第一であるが、他に、まず企画が良かったこと。経済的スポンサーに恵まれたこと。ボリビア政府の全面的支援が得られたこと等があったと思う。一方、成功を阻害する要因も多々あったと思う。隊が学生、社会人、他大学、日本人、ボリビア人、という混成チームであったこと。複雑な指揮系統。等々、数え上げればきりが無いほどであったであろう。それらの困難を若い諸君がむしろバネにして乗り越え、最終的に目標を達成できたことは隊員諸君の努力に負うところ大である。帰国後、ある隊員から今回の活動は軍に守られ、決まったルートを移動しただけ、余り探検的ではなかった。というような感想を聞いたが、だからといって今回の遠征が探検活動として価値が低いとは私は思わない。

探検活動にはいろいろな形があっていい。私達がフィリピンへ遠征した頃はまず経済的な準備が大変であった。貨物船に便乗させてもらって経済的負担を少しでも軽くしようとするのであったが、貨物船特有のスケジュールがなかなか定まらないという欠点があった。しかし、約 30 年前のことで、経済的にも交通手段にもまだ恵まれていないことから、海外の余り知られていない土地へ行くだけで探検活動になった。こういう点はある意味で私達の時代は恵まれていたと言えるだろう。

時代の変化とともに探検活動を行う上での困難さが変わって来たように思える。今回の隊員諸君は私達が活動していた頃とはまた違った困難を味わったに違いない。そして、今回のスポンサー付き、ボリビア政府との合同という遠征も新しい探検活動の形で市大探検部としては新境地を切り開いたと言える。確かに経済的、安全面で恵まれたところがあったが隊員はそれぞれの立場で諸々の困難に遭い、それらを克服しながら遠征をやり遂げた筈である。私はそのことに隊員諸君は自信と誇りを持っていいと思う。隊員諸君はこの遠征を通じて掛け替えのない経験、体験を身につけた。これは一生ものだ。帰国してまだそれほど時間がたっていないので、身についたものがどれほどのものかは、まだ実感できないかもしれない。しかし、これが時を経るに従って強く感じられて来るものだ。それは懐かしむとは違った思いである。自分は確かにあの厳しい環境に対峙し、克服したという自信のようなもので、それは心の奥底に刻み込まれている。

今回の遠征で隊員諸君は必ずこれからの人生において糧となる経験、体験をそれぞれの立場で頑張った分だけ獲得したと思う。

だから、何か大きな力を自分自身に取り込んだ諸君の将来が私は楽しみだ。

諸君の今後の奮闘を期待して止まない。

尾瀬リーダー冬季講習会

＝ 群馬高校登山部一つの記録 ＝

1995年卒 宮崎捷二

☆春休みの雪の尾瀬で

2000年3月26日(日)

沼田駅からのチャーターバスは11:14に尾瀬戸倉に向け動き出した。群馬県北部は予報では大雪とのことだったが、椎坂峠・片品の谷間はその気配は全くない。しかし、鎌田の集落を過ぎるところから舞い始め、車窓から真北に見えるはずのアヤメ平の雪線や雪底は望めず、やがて周りは一面白に変わってきた。尾瀬戸倉の通称並木駐車場で開会式も積雪の上・降雪の中だった。今年の「リーダー講習会」の参加校は21校、生徒は男女で約110名、顧問教師は35名ほどになった。午後の日程は、班長教師を中心に男子4班・女子3班に編成し、すぐ近くの並木ゲレンデ跡地で、明日からの行動に備えて、つば足歩行・ワカンジキ歩行・ラッセル・読図コンパス訓練を積む。この時季にしては例年にない大雪で訓練には好都合だった。初日の夜は、戸倉の地・富士見旅館での素泊まりだ。館外は、夕餉の準備の石油コンロの元気な音、それぞれのパーティーの調理の匂い。食後は大広間を借りての全体ミーティングで、ワカンジキの縛り方・ガスコンロの取り扱いのポイントなどを学ぶ。班別ミーティングでは雪鋸・雪スコップなどの装備点検・分配をして明日以降に備える。当リーダー講習会は3泊4日の日程で行われ、2泊・3泊目は、富士見峠の西に位置する富士見小屋を掘り出して使わせてもらうのだ。

☆あんれまあ小屋がない？

2000年3月27日(月)

起床時にはほんのり舞っていた雪も、集合出発時刻頃には、空の青壁に白色の下弦の月がはめ込まれていた。班ごとのミーティング後、6:30には色とりどりのヤッケ・スパッツ・ザックカバーの隊列が動き出す。2日前の時季はずれの大雪のために大型圧雪機が動き回る戸倉スキー場を通り抜け、硫黄沢沿いのルートを富士見峠へと向かう。例年ならば崖からの水の滴りなどに、春の気配が多少なりとも感じられるのだが、ワカン歩行でさえ膝より上まで沈む。もっと早く着いた班もあるが、小生担当の女子班は、8:45に富士見下に着く。ここまでは夏場は車が入れるなだらかな歩きだ。30分程休憩して動き出す。夏道を辿ればジグザグだ、雪の上なら自在にルートをつくれると、直登気味に進む先頭パーティーはただならぬ大雪のラッセルに喘ぐ。富士見下から約1時間、落葉松林の中にポツカリと平らな空間をしめる田代原に着く（ここは湿原だが地図のルート上には無く、夏季には踏み込むことは

できない)。アヤメ平から南に張り出す雪庇がはっきりと見え、雪煙も上がっている。読図・コンパスワークの説明をする班長もいる。昼食を含めて約1時間のくつろぎ後、11:15踏み跡を沢山残した田代原から再び富士見峠へと向かって動き出す。地図上の夏道を辿らず、途中から冬路沢沿いにルートを取り、渡渉後左岸を更に遡り高度を徐々に上げていく。不意にいくつかの爆音を残し、いくつかのヘリの機影が頭上を通過した。しばらくすると一緒に歩を進めていた富士見旅館・富士見小屋主の萩原さんの携帯電話に「尾瀬の山小屋の雪下ろし要員を乗せた新日本ヘリが、離陸直後尾瀬沼近くに墜落した旨のNHKのニュース速報がつい今し方あった」との情報が入る。「怪我人はいるが死者は無い模様」の続報も入る。その後も何機か通過して行く。

あんれまあ小屋がない？ 14:00 西と東の切り妻部分が、わずかに小屋であることを示しているほどに、すっぽりと雪に埋もれた富士見小屋に到着だ。こんな大雪は小生にとっても初めて。30分程休んでから小屋掘り出しの作業に合流する。とりあえず二階の窓の上縁までの雪を取り除き、ザックの荷物を運び入れる。一階からの出入り口を開けるのに何と4時間以上も費やすことになった。真っ暗な小屋の中も小屋主のご好意で自家発電の灯がともる。夕食準備の活気の最中、班長ミーティングでは本日の行動の報告と反省点を出し合い翌日に備える。食後、生徒たちは班別に分かれたミーティングで、それぞれの学校の今日の反省と明日の行動を確認し、ひんやりとしたシュラフに潜り込む。

☆雪洞掘りの訓練も

2000年3月28日(火)

4:00を境に1階のフロアーは活気を取り戻す。食事を済ませ、サブザックに必要な装備を詰め込んで、6:30の薄日射す屋外での全体集会後班別行動に移る。午前中は読図・コンパスワークの訓練をしながら、白尾山、皿伏山、荷鞍山方面を歩き回るのが戸倉から峠へのラッセルに較べて、雪が思ったよりも締まっていて歩きやすい。午後の行動は富士見峠のすぐ北の斜面を利用しての雪洞掘り訓練だ。雪洞の設置地形の判断、雪鋸・雪スコップの使い方や、四角いブロックにしての雪の掘り出し方などを学ぶ。自分たちの手になった雪洞の中に身を屈め、十分に満足感に浸る間もなく、スキーを使つての緊急機組立て方や、模擬怪我人を仕立てての運搬の実演を見学したり、実演に加わったりして16:00頃には全員が小屋に戻る。再び夕食準備の活気の最中、昨日と同様班長ミーティングを開いて翌日に備える。19:00からは群馬県山岳連盟に所属する山岳会のメンバーによる「講演」、講師も群馬の高校登山部で育ち世界の屋根に挑戦している優秀なクライマーの先輩だ。8000m峰の全座征服に挑戦し志半ばで、植村直巳と同じく冬のマッキンリーに散ってしまった沼田市出

身の若き登山家・山田昇も、この冬季講習会から育ってゆき「講演」をしてくれたこともあった。

「講演」後は生徒たちは学校間交流、顧問たちも全体集会・交流会。21:30には発電機の音も消え小屋に静けさが戻る。

☆雪崩に道をふさがれて

2000年3月29日(水)

お世話になった小屋の清掃を済ませ、快晴の下朝の集会後3日前のルートに戻り下る。田代原では多くの班が車座になっての反省会だ。富士見下への途中、本講習会にとって初めての、数時間前に発生したと思われる雪崩によるルート寸断に見舞われ、危険を回避し急斜面の腐りかけた雪の下りを、腰まで沈みショートカット。

12:10 雪も融け舗装面もすっかり乾いた並木駐車場での閉会式で、今年の講習会も無事終える。雪焼けした笑顔で新しい友との再会を約束する生徒たち。

☆27回目を数える講習会

このリーダー冬季講習会が始められたのは、1973年のことである。それまでの5年間は同山域で、準備期間として各高校の登山部顧問を対象にした冬山指導者講習会をもち、ルートの検討や安全性を確かめてきた。

1973年と言えば、小生が群馬の高校に勤め始めて8年目、丁度登山部の顧問になった年である。その時にはまだ拘わっていなかったが、それから数年後には冬山指導者講習会・リーダー冬季講習会に参加するようになり、更には登山専門部の役員を務めるようになり、班長も何度か経験してきている。ルートもその当時は地図上の夏道を辿ることが多かったが、アヤマ平から張り出す雪庇の下を通らざるを得ないので、その危険を回避するために、田代原を起点に、アヤマ平から南に張り出す尾根筋を上がるコース・白尾山の西に位置する電波中継塔をめざして登り上げるコース・冬路沢に沿って直接富士見小屋に向かうコース等を開いてきた。

多い年には参加者が200名を越えることもあったが、幸いにも事故が起こらずにやってくる事ができた。

☆80数回もの転倒の末に

指導者講習会についてはスキーで登り上げ、“シール外してパイプの煙……”。峠の一夜は隔年でテント泊・雪洞泊を取り入れている。今では歩行用の踵が上がるスキーの締め具も安価になり、小生のスキー技術も多少向上したが、2mもの重い板に踵固定の普通の締め具、未熟な技術で80数回の転倒の末やっと下山した初参加当時の思い出が懐かしい。

ボリビア日本人移民 100 周年記念追跡調査探検隊全行程

月日	曜日	ラパス隊	リマ隊
8月2日	月	成田発	成田発
8月3日	火	ラパス着 ガリンド大使主催晩餐会	リマ着
8月4日	水	日本ボリビア共同ミーティング 市内観光	国会議員 MATUDA 氏表敬訪問／文部省表 敬訪問／ペルー新報表敬訪問／日本人協会 表敬訪問
8月5日	木	インカ道トレッキング開始	ボリビア大使館夕食会
8月6日	金	インカ道トレッキング	リマ発→ブエルトマルドナード着
8月7日	土	花村氏訪問	日本人墓地訪問／カヌー訓練
8月8日	日	インカ道トレッキング終了	
8月9日	月	記者会見／ジャイカ、日本大使館表敬訪問／ テレビ局取材	
8月10日	火	ラパス発→クスコ着 市内観光	
8月11日	水	マチュピチ観光	カヌー訓練
8月12日	木	クスコ発→ブエルトマルドナード着 日本人隊合流／カヌー共同訓練／日本ボリビア共同ミーティング	
8月13日	金	カヌー共同訓練／マルドナード市長主催夕食会／日系人主催歓迎会	
8月14日	土	川下り出発式典(強風により出発は延期となる)	
8月15日	日	川下り開始 マルドナード発	
8月16日	月	ヒース着	
8月17日	火	支流探索(エコボリビア宿泊)	
8月18日	水	ヒースへ帰還	
8月19日	木	ヒース発→チーベ着 サンファンの方々合流及び歓迎会 室、体調不良のためコビハへ	
8月20日	金	チーベ発	
8月21日	土	室、医師の診断により計画に戻る事を許され合流	
8月22日	日		
8月23日	月		
8月24日	火		
8月25日	水	セナ着 レセプション／歓迎会	
8月26日	木	セナ発 高橋体調不良によりリベラルタへ	
8月27日	金		
8月28日	土	大矢体調不良のため艇を下りる	
8月29日	日		
8月30日	月	佐藤氏合流／リベラルタのテレビ局より取材	
8月31日	火	リベラルタ着 到着式典／リベラルタ市長表敬訪問	
9月1日	水	慰霊祭参加／日本人協会記念式典参加／日系人の方で昼食会／ガリンド大使主催夕食会	
9月2日	木	トゥミチュクワ湖観光	
9月3日	金	リベラルタ発→カチュエラ・エスベランサ見学→グアヤラメリー着 日系人主催夕食会	
9月4日	土	グアヤラメリー発→リベラルタ着 日系人協会主催夕食会	
9月5日	日	自由参加による日系人の方との交流	
9月6日	月	佐藤氏による日系人の歴史についてのレクチャー／日系人のお宅で夕食会	
9月7日	火	リベラルタ発→コチャバンバ着	
9月8日	水	市内観光／ガリンド大使宅で川下りのビデオの上映会及び夕食会	
9月9日	木	コチャバンバ発→サンタクルス着	
9月10日	金	サンタクルス発→オキナワコロニア着 移住地の歴史についてレクチャーを受ける／ 日系人協会主催夕食会	

9月11日	土	オキナワコロニア発→サンファン着 各人ホームステイ先へ移動
9月12日	日	幼稚園運動会訪問／資料館見学／移住地内見学
9月13日	月	小中学校見学／病院見学／農協見学／上園氏再訪記念及び探検隊慰労会
9月14日	火	サンファン発→サンタクルス着
9月15日	水	追跡調査探検隊の計画終了におけるレセプション
9月16日	木	サッカーチーム「タフイチ」訪問
9月17日	金	日本人探検隊解散

インカトレッキング

目的

8月6日より8月10日までの3泊4日で、高度5000mから1500mまで徒歩にておりる。主たる目的として、行程中に隠棲していらっしゃる戦後日本人移民の花村民次氏に会い、氏の経験談を拝聴すること。また、この旅の根底にある目的としての100年前の移民の方々の足跡を実体験に基づき理解するということである。

装備：今回の追跡調査は、国ぐるみの大きな計画であるという特質性より、ポーターがつかってくれるなど、通常の探検部の計画と性質を異にする。ここでいう個人装備とは、個人の携帯した装備であり、共同装備をポーターの持ったものとする。

個人装備：ザック・シェラフ・シェラフカバー・テントマット・カップ・トレッキングシューズ・防寒具(フリースなど)・医療パック・ポリタン・ナイフ・コッヘル・ライター・フィールドノート・ヘッドランプ・電池・コンパス・ソーイングセット・カメラ・トイレットペーパー・ビニール袋・服・靴下・下着・帽子・手袋・タオル・歯磨きセット・日焼け止め・石鹸・非常食・個人の判断による嗜好品など

共同装備：テント・火器・調理用鍋・食糧・水

メンバー：トレッキングには全員が参加したわけではない。ペルーのリマで川下りの準備を進めている人間と今回のトレッキングに参加する者とに分隊している。

日本人隊：隊長 片平吉秀。記録 熊原武博。記録 福榮太郎。装備 本間俊一。装備 本多肇。通訳 多田真由美。中央大学教授 国本伊代。

ボリビア隊：ナビゲーター グアラチ。特別参加 ニッキー。ポーター3名。食糧係1名。

行程記録：目を見張るのは、植生の変化だった。標高5000mには草すら見当たらず、腰を屈めてみると、苔のような高山植物が散在するだけであつた。しかし、一泊目の標高3500前後ではすでに低木が見られ、二日目には高木が道の両脇に覆い被さってくる。三日目の花村氏宅付近には、自生ではないのかもしれないが、バナナの木が果実の房を実らせている。気温は5000m付近では摂氏0度前後。最終日の1500m付近では30度足らず。気温差にして30度近く、水と風呂のお湯ほどの差がある、といえは想像に易いかと思う。その間の植生の変化というのは、想像を絶するものがある。その行程を徒歩で経験するというのは、非常に貴重な経験であつた。

また、二日目の夜に見た星空と蛍の光には、一同異口同音にその景色の現実離れした神秘さを述べている。月に照らされ暗いシルエットとなった木々に無数の蛍がとまり、短い一生を飾るように、オスたちがメスへ愛慕の情を灯している。それは12月24日のモミの

木よろしくといった様だった。天上にはサザンクロスが、また無数の星々が瞬き、このような場で神を語るのはいかかなものかとも思うが、その存在をどこかで感じざるをえないような景色だった。

もちろんこのようなすばらしい経験ばかりではない。標高 5000m という日本一高い富士山よりさらに 1500m 以上高い。初日には高山病にやられ寝込んでしまった隊員も少なくない。また防寒を徹底したといっても氷点下を下回る寒さと、最終日の亜熱帯に近い暑さとの温度差には苦しめられた。体の隅に残る時差ぼけの疲労と、登らずに「下る」という日常において余り使わない筋肉の悲鳴。ただ、このような困難も心地よいと思えるほど充実した経験ではあった。

また、100 年前の日本人移民の方々へ思いを巡らすと、彼らは私たちとは逆に登っているわけである。道の傾斜は場所によって変化はあるものの概してきつい。また彼らが山越えを試みた時期というのは乾季と雨季の間で、山は吹雪く季節となる。その中彼らは私たちのような防寒着もなく、街で買った毛布を体に巻き付け、山を越えたそうである。中には家族連れで試みた人々もいるらしい。当時の移民の方たちは、働き盛りの 20 代 30 代の独身男性が主だったようだ。それでも吹雪く 5000m 級の山をたいした装備もなく、越えたというのは、現実下っただけで顎の上がった私たちには、想像を絶するものだったのだろう。一步間違えれば、死。彼らの前には常に死線がちらついていたのではないだろうか。今回のトレッキングを通して、当時の移民の方々のフロンティアスピリットを痛感した。

四方山話：ナビゲーターにグアラチという登山家がついてくれた。彼はエベレストに二度アタックし、一度は成功させている南米でも有名な登山家らしいのだが、見た目はただの気のいいおっさんである。彼に言わせると「フジヤマ？フフン ベイビー マウンテン」だそうだ。他にも女性の口説きかたの指南だとかろくでもないことしか教えてもらわなかった。もちろんろくでもないことしか聞かなかった我々にその原因はあるのだが。そんなものだから私の彼への理解とは、前述通り気のよいおっさんである。しかし、そのイメージは日本に戻ってから覆されることになる。この時分隊としてリマに滞在していたメンバーの一人が、日本に戻ってきてからのミーティングでボリビアで買ってきた切手を見せていた。そのときどうも見たことのある顔が切手になっていると思っていると、グアラチその人ではないか。一同騒然。その切手に描かれている毅然とした彼の顔のしたには、小さな文字でグアラチと記されている。間違いない。彼は偉かったのである。切手に描かれるような人間を前にして…。一同絶句。覆水盆に帰らず。後悔先にたたず。ただ今でも彼のことを思い浮かべると「げへっへー」という笑い声が聞こえてきそうだ。

(注：花村氏のことは「日系人」のところで詳細を説明する)

インカトレッキングについて

門間 奈々

今回の趣旨の中に「100年前に日本人移住者が辿った足跡を追う」というものがある。それに関連してマードレ・デ・ディオス川下りと山越えが計画された。本来ならばペルーからボリビア国内へ抜けるルートを行かなければならないのだが、現在そのルートは大変治安が悪い(山賊出現の噂アリ)らしい。ガリンド大使からの提案で「インカ道の奥地に隠棲する花村さんに会う」という目的に何時の間にかすり変えられていた。しかも謎の花村氏についての情報は全くない。日本人・男だけである。しかし各々自分の係の仕事が忙しいので、みんなもあえて彼については触れなかった。なんだか良く分からないまま彼に会いに行く事になってしまったのだ。

日本人隊の中で本格的な登山経験のある者は少ない。かく言う私も例外ではない。出発前に高山病対策として登った富士山が初体験。今回のインカトレッキングも「女性が少ないとテレビ映りが悪い」という大使のわけの分からん理由で嫌々駆り出されたのだ。

初めての登山、しかも日本一に登ってしまった私は、まんまと高山病にやられた。女で1人余裕で登頂し「ちよろいじゃん、富士山」などとほざいたのがいけなかった。就寝になって、寒さと頭痛が襲ってきた。ほとんど寝られず、一晩中心の中で山の神々に謝りたおしていた。しかもこの合宿で、かつてはマシーン片平と詠われてきた隊長も、唇を紫色に染めながら頭痛と戦っていた。高山病と経験不足。インカトレッキングへの不安要素は大きい。大きな爆弾を抱えたまま本番となった。

ラパスから車で2時間ほどの距離にスタート地点がある。ここが今回の出発地点だ。あと数百メートルで頂上という場所で車から降ろされ、記念撮影をした後トレッキング開始。日本人9名、ボリビア人9名という大所帯で登る。大使は記念撮影というおいしい所のみをもって帰ってしまった。頂上までの数百メートルが酸素欠乏及び高山病による頭痛の為、何千キロにも感じられる。大昔に十キロ走った時よりも辛い。飄々と歩いていく佐藤さんまで、理由もなく憎く思えてくる。ウォークマンから流れてくる宇多田ヒカルも、今の私にはなんの慰めにもならない。

やっとの思いで登頂。目の前に日本では見る事のできない雄大な景色が広がる。頂上は4800メートル。登山2回目にして富士山を余裕で越えてしまった。草木1本生えていない。見事なまでの快晴と素晴らしいパノラマの中、ひたすら写真撮影。開始から30分にも関わらず既に満身創痍であった。

あとは下るのみ。しかし下っても下っても高山病。現地で購入したリーサルウェポン「ソロッチ」は鬼畜・福栄により最早かけらも残されていない。かつての高山病仲間であった片平・福栄はめでたくメンバー脱退。無事卒業し、にこやかに歩いている。「南米デビューめ」と臥薪嘗胆の思いを胸に抱きひたすら足を進める。途中高山動物リヤマと出会う。やつらはお尻をプリプリさせ、排泄物を撒き散らしながら嵐のように走り去っていった。とてもスカした顔をしていた彼らのチーズとハムが昼食に出た。美味。

テントを張るとともに寝込んだ私に対し「スープ飲む?」「ソロッチ貰ってきた」等皆恐いほど優し

い。これも一種の高山病だろうか？と疑いたくなる程である。しかし本多がテントへ入ってくるなり、異臭騒ぎが。いくらソロッチをくれた恩人とはいえ、納豆臭い足にはさすがに刺し殺したくなる。寒さ・高山病・本多。まさに三重苦である。

問題の一日目を越えると後は非常に楽勝であった。丈の低い草から木へ、湧き水から川へと下るにつれて景色の変化も楽しめる。2日目の夜の夜景は見事だった。空一面の星とクリスマスツリーのように点滅する多数の蛍が、幻想的な空間を演出していた。南十字星の下で真っ裸でになって岩の上で踊り狂う熊原の尻が、今でも忘れられない。

今回のトレッキングの目的である花村氏の家に近づくにつれ、私たちは佐藤さんから花村氏についてのレクチャーをうけた。聞けば聞くほど謎が深まる。一応みんなでない知恵を絞って質問事項をまとめておいた。最大の謎は花村氏にとってのアイデンティティー。あと数十分で到着という時になって初めて、花村氏に私たちの来訪が伝えられていないという事を知った。20年近く山を下りていないという花村氏。「もしかしたら既に……」という不安を抱えたまま彼のもとへといく。

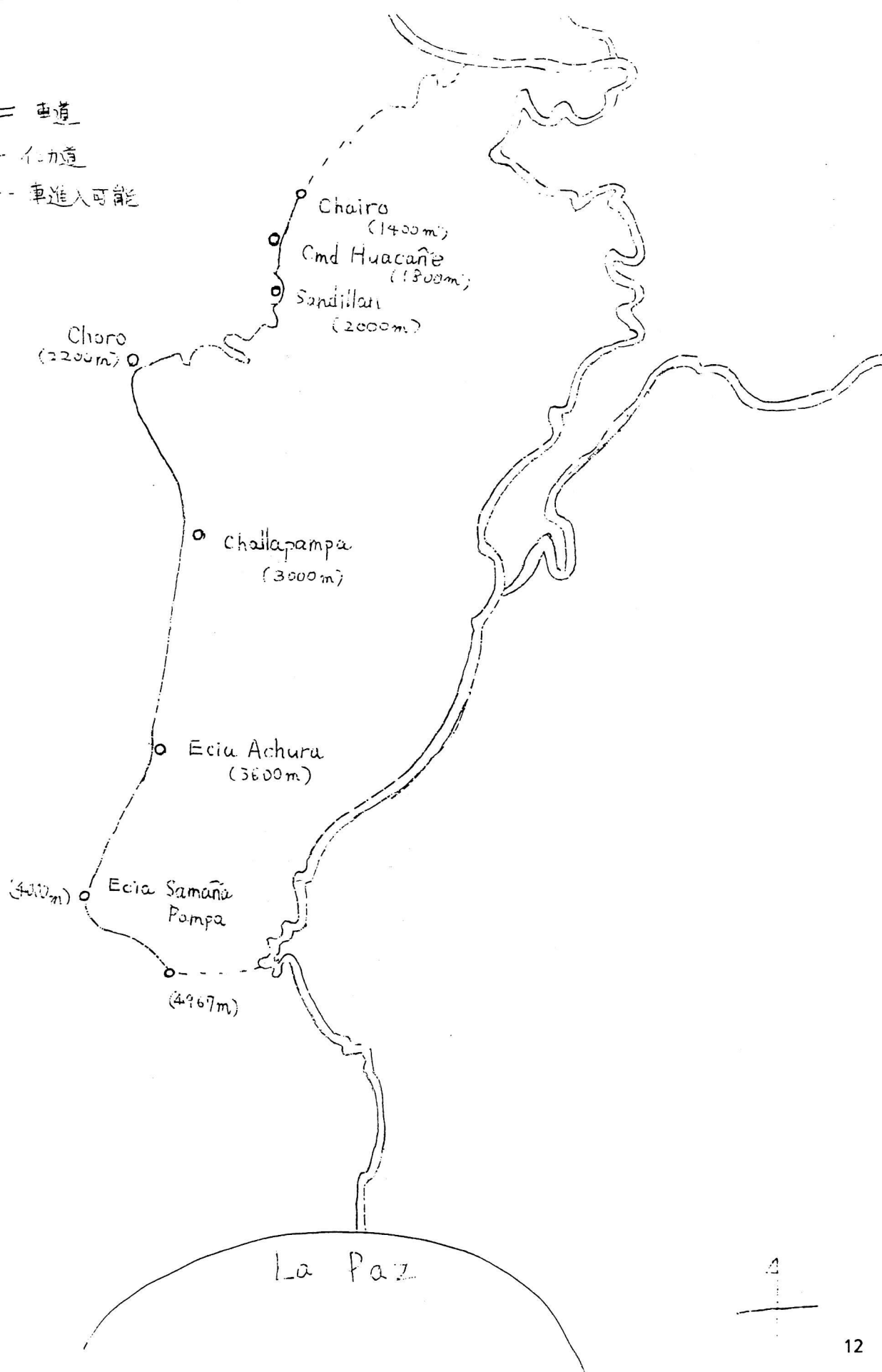
彼はやはり謎の人だった。実際お会いしてみてもそう思う。夜ビール持参で話を伺いにいったが、そこでもやはり謎だらけ。隊長・片平の健闘も虚しく、一番聞きたいことが聞き出せない。あんなに孤軍奮闘な片平を見ることはもうないであろう。「花村さんの好きなことばはなんですか？」「スペイン語」「座右の銘は？」「どんなメイ？」そんな彼の前に私たちは、ただただ無力だった。

後日私たちが歩いたルートが観光地化するかもしれないという話を聞いた。できれば観光地化などせずに、あのままの自然を残して欲しいと思う。植生の変化や気候の変化など、同じ山でも高度によって全く趣がことなっていた。ガリンド大使の気まぐれにより、嫌々行くことになったインカトレッキングだが、4日間という短い期間の割には非常に内容の濃いもので、その後行ったどんな観光地よりも一番行って良かったと思える。それはボリビアの人と自然の素朴さを体感できたからではないだろうか。それは私の中であんなに苦しんだ高山病の辛さをも打ち消してしまった。現代の日本が何処かで失った時間の流れを、あの場所では確かに感じる事ができた。



▲トレッキング中に出会ったリヤマ

- == 街道
- - - 小径
- - - 車進入可能



マードレ・デ・ディオス川下り

目的：100 年前の移民の足跡を辿りつつ、川筋に住む日系人の方々と交流する。また、アマゾン川の支流にあたるこの川で、大自然に触れる。

装備：駐日ボリビア大使同行などの諸事情により、軍隊のエンジン付きの船が伴走してくれた。水上で使わない荷物は全て軍の船の上に置き、軽装で今回の計画に望んだ。常時携帯していたものと、陸上で使ったものと分けて記しておきたい。

携帯品：GPS・トランシーバー・レスキューロープ・ライフジャケット・コンパス・ホイッスル・防水パック・メガネ紐・リバーナイフ・虫除けスプレー・かゆみどめ・医療パック・カメラ・モスキートネット・ライター・タオル・トイレットペーパー・フィールドノート・ポリタン・地図

陸上装備：テント・テントマット・火器・ザック・カヌーリペアセット・蚊帳・浄水機・食糧・水

メンバー：メンバー表参照

行程記録：日程表に概略が記されているので参照していただきたい。8 月 14 日に出発予定だったのだが、スールという南極から吹いてくる強風により、翌日の 15 日に出発が延期となる。このスールは、乾季の間に数度吹くのだそうが、今年いちばんのスールにあたってしまう。強風の上に、気温も下がる。それまでは半袖で汗をかいていたが、スールが吹いている間、夜などはフリースを出さないと耐えられないくらいだった。緯度的には赤道に近いというのに南極の風がここまでやってくるとは、正直驚きであった。翌 15 日には風も多少おさまり出発となるが、進行方向から吹く逆風を受け、また風を受け波立つ水面に翻弄されつつカヌーを漕ぐ。カヌーはアーリー社のカナディアンタイプ。装備の人間に話を聞くと、安定性と積載量、折りたたむという利便性を買ったという。確かに喫水が深く、非常に安定性のよいカヌーではあったが、推進力に少々欠け、逆風の煽りを受け初日から難渋した。だが、日をおうにつれ風は治まり、隊自体がペースをつかみ出すと平均時速 8km をマークする。当初の計画では、1 日で 6 時間行動の 30km を目標にしていた。ようするに平均時速 5km で計算していたことになる。概して、机上の計算と現場の数字は差が出てくるものである。我々は 30km を基準とするのではなく、6 時間行動を基準にして行動することに決め、ゴールのリベラルタを目指すことにした。ただ、こうなると単純計算で一日 48km 進むことになるが、現実には 6 時間の中にレストを挟みながら動いたので、1 日に約 40km ペースで行動した。

翌日の 16 日の夕方にはペルーとボリビアの国境の町、ヒースにつく。ここでは軍の施設

を使わせてもらい、19日まで滞在する。この間に支流探査を行い、野鳥、ヘビ、ワニの姿などを見る。支流の上流域にエコポリビアという宿泊施設があった。最近完成したそうで、ホテルとして建設したとのことだった。ただ、場所的にはヒースからエンジン付の小型ボートで遡上すること約4時間かかる。果たしてそのような辺鄙な所に人が来るものかと疑問に思ったが、ゆくゆくはヘリポートを作り高級ホテルとして売り出さらしい。私たちは幸運なことにそのホテルの記念すべき宿泊客第一号だったらしく、非常に歓迎してもらった。確かに「高級ホテルに」と言うだけのことはあり、建物の作り、サービス、食事どれをとっても自然と融合した良い雰囲気を醸し出していた。建物は木造の高床式。食事は新鮮な鶏肉、卵をベースにしたもの。照明も必要以上に明るくなく、間接照明を主にして明かりをとるという感じであった。ただ、あの立地条件を選んだことについてはいまだに謎であるが。

19日にヒースを出発し、18km下流のチーベというところに着く。ここでは、サンファン移住地の方々が、陸路3000kmを車でとばし応援に駆けつけてくださる。そこでは盛大なバーベキューが催され、私たちの労をねぎらっていただいた。頭が下がる思いである。サンファンの方々はその後も魚釣りをしながら、私たちと同じ位のペースでリベラルタまで下ったらしい。というのもテント場が同じになったことがなかったため、水上で姿を拝見することはあっても、時間の流れが緩慢になる夜のひとときを共に過ごせなかったのである。ただ、アマゾン川流域に生息する淡水魚を刺身にし、醤油とワサビを差し入れていただいたときの喜びは、隊員一同、忘れがたいものとなった。また日本の淡水魚のイメージというと泥臭さを払拭できないが、ご馳走していただいた刺身は、川魚特有の臭みというものは、ほとんど感じられなかった。ちなみに川自体は、お世辞にも綺麗だとは言えない。というよりも日本のどこの川よりも見た目は汚いであろう。透明度はほとんどなく、泥に茶色く濁り、川筋の街からの排水は下水処理されないまま垂れ流されている。少々汚い話になって恐縮だが、川をカヌーで下っていると川面に盛りがった泡の固まりを無数に見た。現地で働く海軍の少年に「あれは、なんだ」と言うようなことを聞いてみたところ、意味ありげな含み笑いを浮かべながら「トイレから来た」というのではないか。要するに米が異なったもの。有り体にいうと糞なのである。しかし、だからといって魚が不味くなるわけでもなく、差し入れてくださった刺し身を、私たちは殺気交じりの和気藹々とした雰囲気の中、先を争って箸を伸ばした。また、私たちは、変わり果てた大便の残骸を横目でやり過ぎしながら、無邪気に川遊びに興じたものである。実際、大汗をかいて一日の行程を終えるとそのような状態の川でも身を浸し、涼をとりたくなる。また石鹸をつけて体を洗えば、さっぱりして気持ちよく熟睡できたものだ。日本のどぶ川でそのようなことをすれば、狂気の沙汰なのだろうが、人間の適応力と自然の雄大さは、得も言われぬ魔力を持つのである。ただ、生活排水の問題からもわかるように、現地の人々は環境問題というものへの意識は希薄なようである。いままで環境を破壊しながら経済を発展させ、暮らしの豊かさを追求してきた我々が、余裕が出できたからと言って、これから発展しようという

国に環境問題のモラルを問うというのも、身勝手な話ではあると思うが、それでも自然の魔力は無限ではないということを知って欲しいと感じたのも事実である。

8月20日チーベ発。ここで室が体調不良のため、検査を受けに近くの街まで行くことになる。近くといっても検査ができるだけの設備を持つ病院がある街へ行くにもチーベから陸路で4時間ほどかかる。ここでも国本教授はじめ、日系人、また現地の方々には格別の配慮をたまわり、お礼の言葉もない。幸い室の体には、脱隊などという、差し迫った異常があるわけでもなく、翌21日の夜には隊に戻ることができた。

8月25日、中間地点でもあり昔（現在でもディオス川の川筋では有数の規模の街である）水上交通の要所ともなっていた セナに到着する。ここでは街を挙げて歓迎をしてもらう。晚餐会で小学校の子ども達の踊りや、歌を披露していただく。この旅を通して言えることなのだが、地球の反対側の島国から来た一介の学生達に、日系人はもちろん現地の方々まで非常に歓迎していただいた。一同感激すると共に「ハポネス」という民族をここまで許容してもらえたというのは、現在の日本政府の支援、努力もさることながら 100 年間の年月の中で、日系人の方々がボリビアで積み上げてきた「ハポネス」または「ニックエイ」という信頼の上に成り立っているような気がした。

8月26日セナを出発するが、今回の行程を通して体調の芳しくなかった高橋が、カヌーの上で倒れ、水の中に落ちてしまうという事件が起こる。幸いライフジャケットをしかりと身につけていたらしく、大事には至らなかったのだが、体力の限界と感染症の疑いのため、一足先にゴールであるリベラルタで療養することになる。この後彼女は、検査や治療のためほとんど隊と行動を別にしてしまう。ただ、命に関わるようなことが無く、不幸中の幸いだったと言える。彼女だけではなくセナをすぎた辺りから、一同に疲労の色が濃くなってくる。気温にして30度オーバー。川の上には日差しを遮るものがないので体感気温は40度ちかくまでであったのではないだろうか。その中でのカヌーの操船である。否が応でも疲れは蓄積されていく。もちろん我々もある程度の疲労への自覚があったので、日中最もあつい正午前後を昼休みに当て、熱射病、日射病の予防対策をしいた。それでも亜熱帯の太陽は私たちの体力を削っていった。28日に高橋に引き続き、大矢がカヌーの上でダウンしてしまう。彼女は熱射病だったらしい。付き添っていてくれたイボ医師は、高橋と同様に大事をとって彼女をリベラルタに戻したがったが、ゴールまで対した距離ではないのと、本人の強固な意志のため彼女は、そのまま行動を共にすることになる。

そして、8月31日。ペルーのプエルト・マルドナードを出てから17日目ゴールのリベラルタに無事着くことができる。リベラルタではゴール地点の川縁に人壁ができ、花火があがり、盛大に歓迎式典を催してくれた。その多くに日系人の方が参加してくださったのも我々にとっては非常に嬉しいことであった。皆、顔には達成感と心地よい疲労が見られ、盛大な歓迎式典を前にして、感動がわき上がってきたのを、今でもありありと思い浮かべることができる。

あのとき口の中でアドレナリンの味が、した。

四方山話：川下りににおける印象深い出来事の1つに、野生のフラミンゴを見ることができたということが挙げられるであろう。ジャングルといえども乾期と言うことが影響してか、風景はさほど色合い豊かなものではなかった。その中でフラミンゴのピンクというものは違和感を禁じ得ないほど艶やかだった。実際ある隊員の行動記録の中には、フラミンゴの感想がこのようにつづられている。『自然の中から何故あのような色が生まれてくるのであろうか』。その光景に居合わせた人間からすると非常に的確な表現のような気がする。それほど自然の中のフラミンゴの桃色は鮮やかに私たちの目に映った。

生物といえば、忘れてはいけない話がある。魚の話だ。私たちは、現地に行くまで、アマゾン流域にはピラニアがわんさかいて、水に落ちようものなら手足の一本は覚悟しなければと思っていた。しかし、実際のところピラニアはあまり人などの大型動物を襲うことはないそうである。なぜか。エサが豊富なのである。別段大型の陸上生物が誤って水に落ちてくるのを待たなくとも、十分にエサにありつけるのだ。私たちも水浴び、水遊びの類はすべて聖母川、マードレ・デ・ディオス川で行ったものの、誰一人として、手足がなくなったものはいない。ただ、凶暴な魚はいなかったが、非常にユーモアのある魚が多くいて、私たちを苦笑させてくれた。私たちにとってディオス川の水は、ほとんど透明度がないように見えるが水生生物にとっては生活の場。水が濁っていても見えるものは見えるらしい。私たちが水にはいるとき、男性諸君は、上半身裸になりオス河童化する。すると好奇心おおせいな彼らはどうも私たちの乳首が気になるらしい。エサに見えるのかどうか知らないが、遠慮なく食いついてくる。幸い彼らはかわいい口と歯しか持っていないようで、乳首の先が紛失するということはなかったが、これはかなり度肝を抜かれる。大抵一度水の中にはいると、どこかで「わあ」だの「ひゃあ」だの「おふん」などの怪しい奇声が飛び交うことになる。しかしあるときひとときわ大きい奇声が一同の耳を襲った。一瞬、乳首を遺失物係に探しに行かなくてはという思いが頭をよぎる。次の瞬間「両方いっぺんにやられた」。なんというニヒリズム。なんという無邪気さ。一同腹を抱えて笑った。ただ今思うとピラニアが好奇心のあまりない魚だったことに胸を撫で下ろす次第である。



▲水浴び

アマゾンの「カ」

本多 肇

川下りにおいて。とにかくにも、皆が一番悩み、イラつき、嫌だったのは、蚊である。帰ってきて、いろいろな人からの質問で、「一番苦しかったのは何？」と聞かれ、全員一致で蚊を挙げる。全員同じこと言っても面白くないだろうと思い、何か他のことを言おうと考えるも、どうしても一言蚊のことを言い添えておきたくなる。川下りにおいての最大の難敵、蚊について述べてみよう。

もっと正確に言うと、蚊ではなく、ブヨである。アマゾンにいるのは、日本の蚊よりももっと大きくてごついやつ、と想像されそうだが、私たちが出会ったものは、体長 1.5mm 程の、ブヨといったほうがいいやつであった。日本のヤブ蚊に似たものもいたが、川の後半の方に登場し、不快感においてはそのブヨに劣る。もちろん川においては全ての蚊が不快だったが、ここではとくにひどく、特徴的なそのブヨを、以下「カ」とし、日本のヤブ蚊に似たものを「蚊」として、具体的に日本の蚊と何が違い、どう、より嫌だったのかを細かに分析してみよう。

まず何よりも、「カ」の数の多さである。肌が露出した部分はことごとく刺され、治るのを待たず次々に刺される。用足し時に露出すればきちんとそこも刺される。ちなみに、尻を刺されると、座ってカヌーを漕ぐためにこすれて、また川の上だから濡れやすいということでごやけて、どうにも嫌な感じである。出発前から、ある程度予想はしていたことだった。「アマゾンには蚊が多い。虫よけスプレー、蚊取り線香、虫さされ薬、蚊帳などたくさん用意しよう。」私自身は、個人装備で虫よけスプレーを3本用意した。しかし、現地では、あまりの蚊の多さに量を使い、残り少なくなったスプレーを惜しみながらも、蚊憎さに俵約を忘れる、というはめにおちいった。

そして、「蚊」と比べて「カ」への嫌悪性をより高くしているのが、その喰い跡の様である。「蚊」に刺されると、人により違うが、まあそこそこ直径 1.5mm 程に赤く丸く腫れ、かゆくなる。「カ」に刺されると、刺された所は、小さい、ちょうど「カ」と同じ位の、赤く、固い点になる。‘赤’色は「蚊」のときのほの赤く血色づく赤ではなく、もっと^{なま}生な、血だまりといったような、血がポツンとたまって、それを皮フごしに見るといった感じである。実際、その跡が治るとき、血まめのように赤紫になって消えていく。そして、その跡は「蚊」よりももう少しかゆい。(気がする。)それに加え、私の見解では、たぶん川下りで砂浜にテントを張らざるを得ないことによって、どうしても身体や衣服に砂がつくことが、かゆみ、というよりも「不快感」を1, 2倍くらい増すと思う。「カ」の跡はそんなに腫れはしない。しかしそれも、一点集中的に腫れないというだけのことで、数刺されて、腕回り、首回りが少し太くなっている隊員もいた。跡が消えてなくなるまでの期間だが、旅の疲れ、食事などの慣れない生活習慣、大量の「カ」の毒に対する体の免疫機能の低下など、諸々の副

次的要素の存在もあったが、帰国して2ヶ月が経とうとする今も消えないで残っている隊員がいる。

さらに「カ」は、「蚊」よりも素早い。その膨大な数と、残忍な喰い跡に怒り、イラつき、目のわが腕に巣食う「カ」をひっ潰そうとも、そのまま感情に任せた気配ミエミエの荒い素振りではヤツらを捕らえられない。内心怒りに燃えながらも、冷静に静まり、何も気に留めたフリを見せず、周到に、位置、角度、タイミングを見定め、正確にかつ素早く腕を振るうことでのみ、アッシさせることができる。

不思議だったのは、これ程「カ」に悩まされる川下りの間、私たち日本人は「カ」に刺されないよういつも暑いなか長袖を着用していたのに、軍のボリビアーノたちはそんな私たちの横で、平気でTシャツ、短パンで過ごしていたことである。彼らは、刺されていることは刺されているのだが、私たちに比べて圧倒的に数が少ない。「カ」がとまってもさして気にする風でもなく、時折手をパタパタやる程度である。カタコトのスペイン語で聞いたところによると、この地域にずっといるから、子供のときからいるからだ、ということらしい。もう免疫ができあがっているということなのであろう。

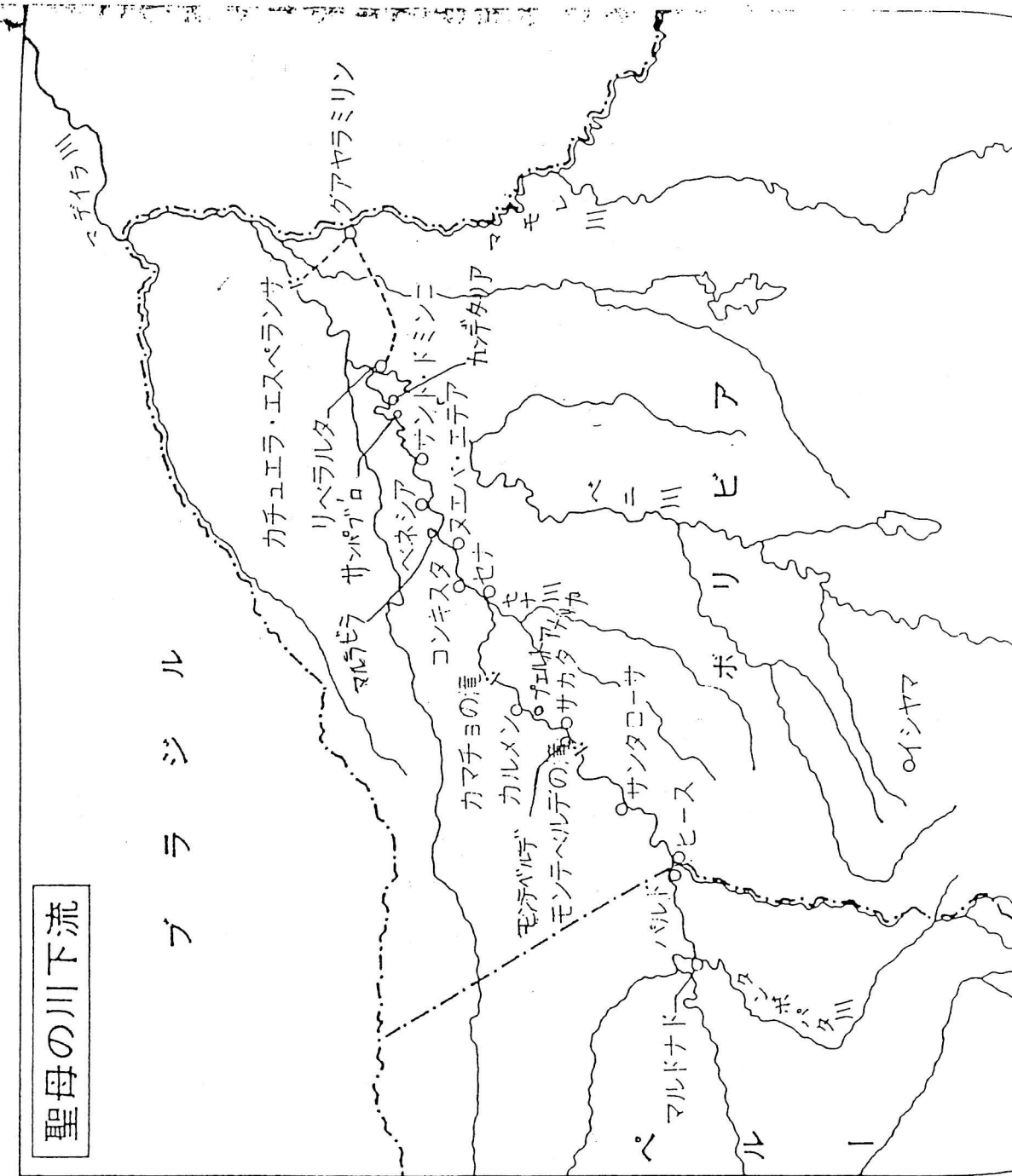
快適そうなボリビアーノを羨みながら、たぶん皆が一回は志したのが、「もう気にしないことにする」という、いわゆる無我の境地である。誰しも、かゆかったり痛かったりどうにも気になっていた所が、何か他のこと、例えばスポーツなどに夢中になっている時はぜんぜん気にならなくなっていたという経験があるだろう。後になって思い出して、ああそういうばさつきは何ともなかったなあと気付く。それと同じような境地に達するべく、半分意識的に「カ」に関する、かゆみやらイラだちやらを頭の中から追い払うわけである。「心頭滅却すれば…」である。

まあ、そんなことで平気になるんだったら苦勞しない。結果はいうまでもないが、むしろ気にしないのをいいことに余計刺されたりする。「…すれど「カ」はまだ痒し」。はかなく挫折した後も、絶え間なく「カ」はやってくる。私たちの思惑、どうにか耐えていこうという努力、ああその健気さ、などには、全く、全く無関心に無関係に、ただ「カ」としての営みを続けていくだけの「カ」。それは、「カ」よりもむしろ大自然の営みというヤツである。大いなる大自然。人間の思惑なんぞ大自然のちからの前にはなにほどのものでもない。自然のちからって偉大だよなあ。

アマゾンの「カ」は、偉大なアマゾンの「^{ちから}カ」であった。

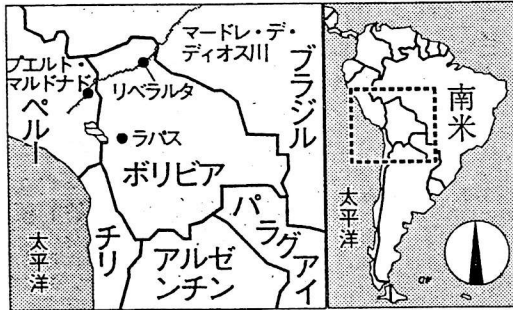
聖母の川下流

ブラジル



7/29 夕刊4版

ボリビア移住100年記念



横浜市大生と 駐日大使ら アマゾン 600キロ川下り

南米ボリビアに日本人が移住して今年で100年になるのを記念して、横浜市立大学探検部と在日ボリビア大使館の合同隊が8月から9月にかけて、初期の移民たちの足跡を追体験する計画を立てている。ペルー側からアンデス山脈を越え、いかだで川を下って天然ゴムが自生するアマソンの密林に至る「ペルー下り」と呼ばれるルート。それをなぞり、アマソンの源流の一つ、マンドレ・デ・ディオス(聖母川)約600キロを手にきかすりて約1カ月かけて下る。出発を控え、学生たちは「川下りを通じ、新天地を目指した移民の魂を体感し、現地の日系人らと交流を深めたい」と最終的な準備に余念がない。

【大槻 英二】

メンバーは、日本側が隊長する予定。途中で、戦後長の片平吉秀さん(20)同ボリビアに集団移住したサ大商学部3年II組探検部員、ノンファン移住地の日系人が9人と、中央大生2人、拓殖大生1人の計12人(うち女子学生6人)。スポンサー企業社員2人も同行する。ボリビア側は、エウドロ・ガリンド駐日大使(56)をはじめ、医師、軍人ら10人が参加する。

一行は8月2日に成田を出発し、同14日にペルーのプエルト・マルドナドから川下りを開始する。国境を越えてボリビアに入り、9月9日ごろリベラルタに到着する予定。途中で、戦後長の片平吉秀さん(20)同ボリビアに集団移住したサ大商学部3年II組探検部員、ノンファン移住地の日系人が9人と、中央大生2人、拓殖大生1人の計12人(うち女子学生6人)。スポンサー企業社員2人も同行する。ボリビア側は、エウドロ・ガリンド駐日大使(56)をはじめ、医師、軍人ら10人が参加する。

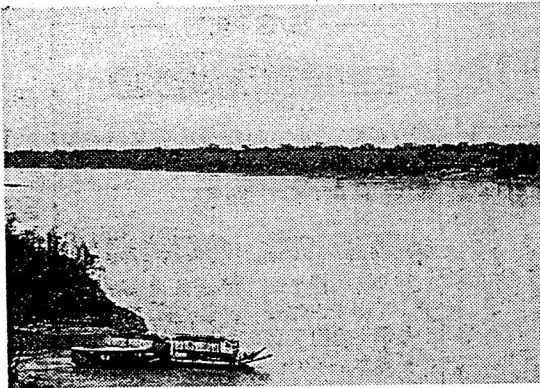
ボリビアへの日本人移民の歴史は1899年にさかのぼる。横浜港から佐倉丸でペルーに着いた790人のうち91人が、さらにティティカカ湖を渡ってボリ

初期移民の「魂」を追跡

ビアに入った。その後、ペルーの農園での過酷な労働を逃れてゴム景気に沸くアマソンの密林を目指し日本人が相次いだ。戦後は2カ所の日本人移住地が建設され、現在約6700人の日系人社会が築かれている。今回の計画は、ガリンド

大使が移民100周年記念の川下りを現地紙で呼び掛けたのがきっかけ。横浜市立大の探検部OBが気づき、両国の合同隊を組織することになった。

南米では1997年にペルーで早稲田大学の探検部員2人が殺害される事件があったが、ガリンド大使は「私が参加することで安全を確保したい」と話す。隊長の片平さんは昨夏、現地の事前調査を済ませており「日本人移民の魂を体感したい」と意欲満々だ。



横浜市大探検部と在日ボリビア大使館の合同隊が川下りを計画しているマンドレ・デ・ディオス川

アマゾン川源流マードレ・デ・ディオス川を約600キロ下り、ゴールのリベラルタの港に入る
日本・ボリビア合同カヌー隊—ボリビア北部リベラルタで、佐藤泰則写す



アマゾンに足跡たどり カヌーで600キロ

ボリビア移民100年



南米ボリビアに日本人が移住して今年で100年になるのを記念し、アマゾン川源流のマードレ・デ・ディオス川を手こぎカヌーで下っていた横浜市立大探検部と在日ボリビア大使館などの合同隊（12艇24人）がこのほど、ゴールとなるボリビア北部のリベラルタに着し、現地の日系人らの熱烈な歓迎を受けた。（社会面に連載企画「100年の夢」）

先月15日にフエルトマルドナドを出発。テント生活をしながら17日間かけて約600キロを下った。今世紀初頭、ゴム景気にひかれたペルーの日本人移民がいかでボリビアに下ったルートをたどった。3、4世の時代になった今もリベラルタの人口の1割は日本人といわれる。川下りの日本側リーダー、片平吉秀さん（20）は横浜市立大3年。Ⅱは「私たちは地図で現在地を知ることができたが、100年前の日本人はどれだけ不安な気持ちで川を下ったことだろう」と話している。

99% 【大槻 英二】

100年の夢

ボリビア日本人移民を訪ねて

南米ボリビアに初めて日本人が入植して100年が過ぎた。その移民の歴史は20世紀の時の流れに重なる。「先進国になる前の、貧しかったニッポン。燃ぐべき土地のない農家の二男や三男、そして町にあふれる失業者たちが国の後押しで海を渡った。それぞれの胸の内には新天地へ一歩掘りかきという熱い思いがあった。成功と挫折、地球の反対側、アマソンの奥地に生きてきた日本人を訪ねた。

商業実習生

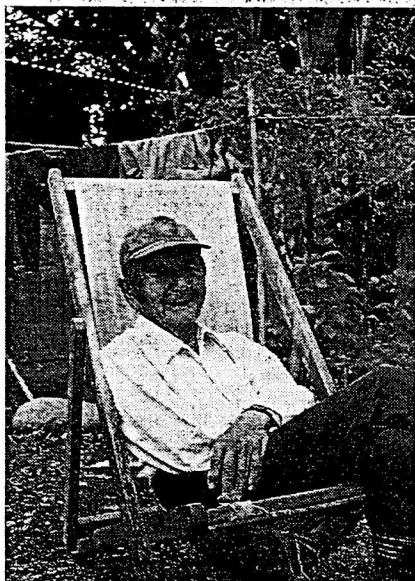
ルレナバケの町はアンデス山脈のふもと、ペニ川の流域にある。アマソンのジャングルエリアの奥深くに知られるこの奥地に私が足運んだのは、戦前からの移住者がまだ健在なところだった。

チャーター車を降ってポートで対岸に渡り、タクシー代わりのオートバイで約10分。山道が途切れるところから森に入る。ほどなく、トタン屋根の小屋が見えてきた。

「おはようございます。不意の訪問にもかかわらず、ほうきで掃き清められた庭先から確かな日本語が返ってきた。アルマンド・ヒサン・オノ(小野)さん、87歳。電気も水道もない小屋で独り煙を耕して仙人のように暮らす。

大分県明治村(現弥生町)の

明治生まれの誇り



森を切り開いて建てた小屋の前で思い出を語る、アルマンド・オノさん。ボリビアのルレナバケで佐藤泰則写真

農業に転じ、開拓現役

実習生に選ばれ、ベル・経由でボリビアに派遣された。23歳。「ボリビアは地獄だ。ここに残れ」。政府所在地のラパスに向かう途中、リマ(ペルー)の日本人にも会った。彼らにとってさへ、辺境の地だった。

それでも「外務省との契約」に従った。標高3800mのラパスの汽車は急坂をあさき、頭が痛くアンデスの山々を見る余裕もなかった。

難関の輸入小売業をしていた日本人の商店で実習生として2年間働いた後、現地の日系貿易会社に雇われた。2年後で支那人を雇った時、日本に一時帰国して役員と結婚する。帰国して役員と結婚する。帰国して役員と結婚する。

「日本人の店から買おう」と制約も受けた。店をたたみ、な顔見知り。ここがいい。山が迫り、川が流れるこの地の風景は、どこか日本の山村に似ていないでもない。

「異国に、里帰りしたことがあ。東京五輪の2年前、兄や弟の家族を紹介されて、もう他人のようでした。殖産学校の同級生が、未婚のまま大人になって聞いた。



若かったオノさんにはなかった。あの時、彼女と結婚していたら、日本に戻っていたかもしれない。人生の岐路だった。結局、取引先の日系2世の女性と結婚する。日本語を話さない彼女にラブレターを書き、やがて2人の男の子に恵まれた。

輸入雑貨を扱う「小野商店」を開いて独立したのは移住から6年後。だが、同じ年の12月には太平洋戦争が始まった。注文しても日本から商品が届かなくな。日本人の店から買おうと制約も受けた。店をたたみ、な顔見知り。ここがいい。山が迫り、川が流れるこの地の風景は、どこか日本の山村に似ていないでもない。

ペルーの第一次移住700人のうち91人が、農園での過酷な労働に反発してボリビアを目指したのは899年。天然ゴムの採掘に始まる移民の歴史は、雑貨商や農家へと変遷する。オノさんがボリビアに渡ったのは64年。開拓の夢は、また途中だ。写真を見せると、おれと頼んだら、汚れた作業服からきれいなシャツとスラックスに着替えて煙を案内してくれた。明治生まれの誇りを見た気がした。

「ルレナバケ(ボリビア北西部)で大徳英二」

●●呼び寄せ移住●●

100年の夢
ボリビア日本人移民を訪ねて

●●2●●



「日本から来た人は兄弟みたいなもんだ」と、まだ工事が終わ

らないうちに新居に通された。

赤土の砂ぼこりが舞う灼熱

の大地が広がる。ボリビア北部

のリベラルタ。1910年前後、

ペルーからマードレ・デ・ディ

オス川を下った日本人は、この

町を拠点にアマソンの森へ散っ

ていった。ゴム採集に一獲千金

の夢をかけた。

□ □

時が流れ、もう一つの「夢」

の形を見た。

市街地のはずれを歩いている
と、2階の屋根を組み上げる途
中の大きな屋敷があった。新し
い家は日本への「出稼ぎ帰リ」
に違いないと聞いて、呼び鈴を
押してみた。出てきたのは日本
人だった。養元得志さん(61)。
「日本から来た人は兄弟みたい

なもんだ」と、まだ工事が終わ

らないうちに新居に通された。

赤土の砂ぼこりが舞う灼熱

の大地が広がる。ボリビア北部

のリベラルタ。1910年前後、

ペルーからマードレ・デ・ディ

オス川を下った日本人は、この

町を拠点にアマソンの森へ散っ

ていった。ゴム採集に一獲千金

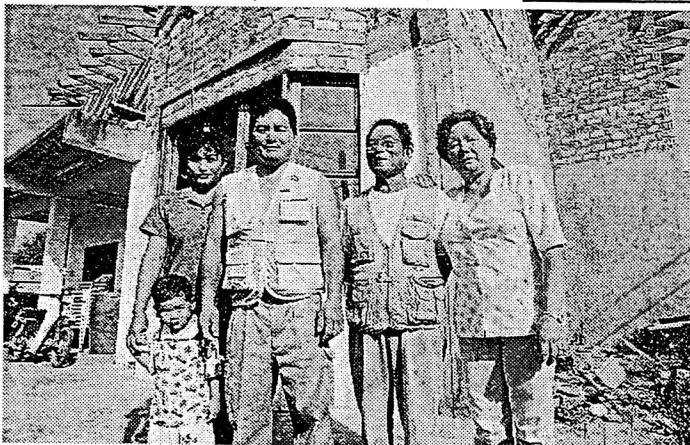
の夢をかけた。

□ □

時が流れ、もう一つの「夢」

出稼ぎが転機に

「あっちでは日本人 こっちではボリビア人」



完成間近の新居で暮らし始めた養元さん(右から2人目)一家。リベラルタで佐藤泰則写真

った。つらい時代だった。

転機は80年代後半に訪れた。日本ではバブル経済が絶頂期を迎えていた。89年に長男ホルヘさん(34)が横浜へ出稼ぎに行つたのに続いて、91年には養元さん自身も日本へ渡った。

30年ぶりの日本は何もかもが交わっていた。日本語も怪しくなり、話し掛けられないよう人目を避けた。バスの乗り方もよく分からない。自分が田舎者のようで恥ずかしかった。それでも、ペンキ屋で3年間働き、3万の蓄えができた。

リベラルタに戻り、4年前、郊外に247坪の土地を買った。網で乱獲するようにになってから、川では魚が減っている。養殖は、きつとうまくいく。苦しかった20年前からの夢なんだ。養元さんは言った。

ホルヘさんは今も日本への出稼ぎを繰り返して、「向こうでは日本人、こっちはボリビア人」と笑う。完成間近の新居も、彼が稼いだ7万が元手だ。養元さんと、再婚した日系2世の妻エルサさん(51)、それにホルヘさん一家の5人で暮らす。

養元さんには、父親として一つだけ気掛かりなことがある。「長く日本にいと、パチンコに行ったり、競馬に手を出したりして、お金がたまらなくなる。長くいると、(ふ)じやない」

玄関先で、日本の標語の付いたカレンダーが目に残った。「ない時の辛抱、ある時の儉約」。養元家の家訓のように読めた。

【リベラルタで大槻 英二】

●●日本人村建設●●

ボリビア日本人移民を訪ねて

100年の夢

●●3●●



南半球特有の暖かな北風がオレンシ色のデイコの花を揺らし、乾期のあとの短い春の訪れを告げる。ボリビア第2の都市サンタクルスの北西約130キロに広がる「サンファン日本人移民地」。カトリック教会のある中心部を歩くと、「こんにち」と日本語で声が掛かる。昭和30年代の下町の人情味が、異国の町並みに溶け込んでいるようだ。

「物忘れが激しくなりましたが、あのころのことは映画のシーンのように覚えています」。武田健司さん(75)は今年、ボリビア日本人移住100周年記念祭の委員長を務める。この地に渡ったのは44年前。ほろ苦い記憶が残る。

「物忘れが激しくなりましたが、あのころのことは映画のシーンのように覚えています」。武田健司さん(75)は今年、ボリビア日本人移住100周年記念祭の委員長を務める。この地に渡ったのは44年前。ほろ苦い記憶が残る。

「物忘れが激しくなりましたが、あのころのことは映画のシーンのように覚えています」。武田健司さん(75)は今年、ボリビア日本人移住100周年記念祭の委員長を務める。この地に渡ったのは44年前。ほろ苦い記憶が残る。

東京・銀座の清涼飲料会社に武田さんが迎えられたのは1953年。パンコク支店の開設準備のためだった。翌年、経営が傾き、支店開設はとん挫する。会社を辞めていった上司たちは、南米での砂糖作りを計画した。「製糖機械を送り、原料となる砂糖きび栽培のための日本人移住地を建設する」。武田さんも誘われた。大学時代にスペイン語を学び、進駐軍で通訳をした経験を買われた。

「このままサラリーマンを続けるより自分の力を試したい」という気持ちではありました。食べるぐらい、なんとかなるだろう」と悩んだ末に会社を辞めた。

移民事業が国策だった時代。外務省の助言もあり、行き先はボリビアのサンタクルス郊外(サンファン地区)に決まる。責任者の西川利通氏(82年に74歳で死亡)の後を追って、武田さんも単身、横浜から船に乗った。55年3月。現地に肩を埋める覚悟だった。転身に理解を示してくれた父の訃報を、船中で受け

脱サラして力試し

原始林を開拓、「幸せな仕事できた」

デイコの花(左)が咲き誇るサンファン移住地中心部の入り口。佐藤泰則写真。円内は武田健司さん



た。

サンファン地区では、原始林を切り開いて移民受け入れのための住宅建設が始まっていた。その現場監督が初仕事だった。住宅といってもヤシの葉をいいた泥壁の小屋。真っ暗やみのジャングルの夜、ヒョウや毒ヘビなど、どんな獣が襲ってくるかわからない。番犬を飼い、鉄砲を抱えてハンモックで寝た。

募集した移民の第1陣、14家族88人が到着したのは同じ年の7月。責任者の名を取って「西川試験移民」(第0次移民)と呼ばれた。しかし、受け入れ態勢の不備から移住者との確執を生み、事業は空中分解。武田さんはサンファンを去らざるを得なかった。

56年8月に日本とボリビアの間

の移住協定が締結されると、サンファンの移住地は国の事業に引き継がれた。野菜作りを始めていた武田さんは、海外協会連合会(現国際協力事業団)の現地職員として採用され、その後10年間、再び移住地建設にかかわることになる。

57年の第1次計画移民(25家族159人)から82年の第53次まで、サンファンには302家族1684人が入植した。道路が未整備だった当初は、ブラジルやアルゼンチンへの再移住者が続出した。今は244家族790人が暮らす。半数近くが長崎県出身者。陸稻・大豆・養鶏、柑橘類の複合経営で、鶏卵はラパスの消費量の6割以上のシェアを誇る。

病院や学校も整備された移住地で、武田さんは感慨にふける。「原始林を開拓するような仕事は21世紀にはないでしょう。それをお手伝いできたことは幸せに思います。あのころは目の前の課題に対応するだけで精いっぱい。ずっと背伸びして生きてきました」。100周年の記念行事が一段落すれば、サンタクルス郊外に借りたハウスでラン栽培に没頭するつもりだ。

【サンファン移住地で大模範】

'99.9.15

●●オキナワ村●●



オキナワ
ブラジル
ボリビア
パラグアイ
サンフランシスコ
サンタクルス
ベルド
チリ

一面のヒマワリ畑に目を奪われた。日本なら観光名所になりそうな風景だ。ここでは油を搾るための作物。貴重な暮らしの糧である。サンタクルスの北東約100キロにある「オキナワ移住地」。221戸818人の移住者は、ほぼ全員が沖縄出身だ。5万坪の耕地に、「本土」からの移住者とは別の、もう一つの移民史が刻まれている。

「沖縄戦で焦土化した郷里の同胞を救済しよう」と、戦前からの沖縄出身移住者が計画したのが新たな移民の受け入れだった。

しかし、用意された「うるま耕地」には苦難が待ち受けていた。土地を掘ると、遺骨の入ったかめが埋まっていた。先住民が放棄した土地ではないかと不安が広がる。「うるま病」と名付けられる出血熱で16人が犠牲になった。「発症して3日目を越せるかどうかが生死を分けた」と安里さんは記憶する。入植した年の12月、移民団は総会を開き、「全員移転」を決議した。安里さんら12人が再入植先を探る旅に出た。正月を山中で迎えた。翌年、1300キロほど離れた地区に移転するが、そこでも十分な土地は確保できなかった。さらに、候補地を探し、現

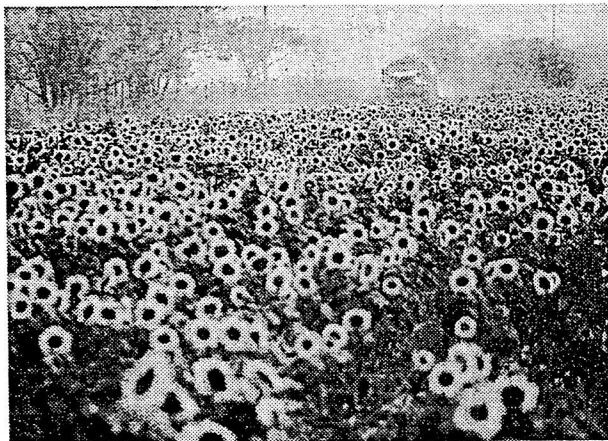
ボリビア日本人移民を訪ねて

100年の夢

●●4●●

流転2年新天地は...

子供らの「帰ろう、帰ろう」つらかった



千ばつに強い作物として広まっているヒマワリ栽培。ボリビアのオキナワ移住地で、佐藤泰則が写す

在の移住地に移転を完了したのは入植から2年後のことだ。それでも、飲料水の確保に苦労した。井戸を掘っても塩水しか出ず、米を炊くとタマゴを混ぜたような濁った色になった。たまり水を獣たちと共有した。毎日、7分幅で20分ずつ原始林を切り開くのが仕事の分担だ。安里嗣幸さん。運悪く大木に突きたり、泣き崩れる年配者もいた。「自分で選んだ道だから夫婦は泣きません。でも子供たちが沖縄に帰ろうと言うのが一番つらかった」と安里さんは振り返る。ある日、幼い長男が泣きながら「帰ろう」と言うのを聞いて、安里さんは涙を流した。飛行機の切符が買えるか」と



言った。家を出た。すぐに戻ってきたが、その情景は今も頭から消えない。

「この農業はくちなんです」。オキナワ移住地の行政機関「オキナワ日協会」の会長を務める具志堅貞典さん(67)は言う。天候に左右されやすい基幹作物への依存度が高いから入植当初はコメを作ったが、雨量が減って収穫できなくなっていた。70年代に入り、千ばつに強い綿作に切り替えたが、今度は雨が降り始めて害虫が発生した。模索の時代が続く。70年代後半に大豆を導入し、ようやく夜明けが見えてきた。とはいえ、ここ3年、試練が続く。移住地東部を流れるグラデ川の洪水、千ばつ、大豆の暴落。ヒマワリ栽培も、そんな「三重パンチ」を乗り越えるための、ささやかな支えなのだ。国際協力事業団(JICA)や沖縄県への陳情に走り回る具志堅さんは「安定の時代に入るにはまだ時間がかかりますが、必ず浮き上がってみせます」。自分に言い聞かせているようだった。

【オキナワ移住地で大規模 英二

二つ

●●二つの祖国●●

100年の夢

ボリビア日本人移民を訪ねて

●●5●●



日本人の移住100周年を記念した慰霊祭が今月1日、ボリビア北部のリベラルタで行われた。1915年に初めて日本人会が設立されたゆかりの地。現地社会に溶け込んで生きる戦前からの移民の子孫と、戦後の新しい移住者が共に花輪をささげ、先輩の霊を慰めた。

「慰霊塔」と日本語で書かれた碑が立つ会場に、弁慶士、根間玄真さん(51)の姿があった。サンタクルス郊外の「オキナワ移住地」で育ち、1世と2世の間という意味を込めて「1・5世」と呼ばれる世代。各地の日本人・日系人会を束ねるボリビア日系協会連合会の会長を務める。

母親に連れられて郷里の沖縄・宮古島を離れたのは8歳の時だった。一足先に渡航した父親から届いた一枚の写真が強く印象に残っている。大きな家の前で、グレイプフルーツを片手に持った父親の姿。「ボリビアに行けば、大きな屋敷に住んで、果物をたくさん食べられる」と無邪気に思った。

農林高校の教師をしていた父親は、戦時中を旧満州(現中国東北部)で過ごした。沖縄に引き揚げた後も「子供は大陸で育てたい」と考えていたという。経済的な理由より、そんな思いが一家を南米での農業へと向かわせた。

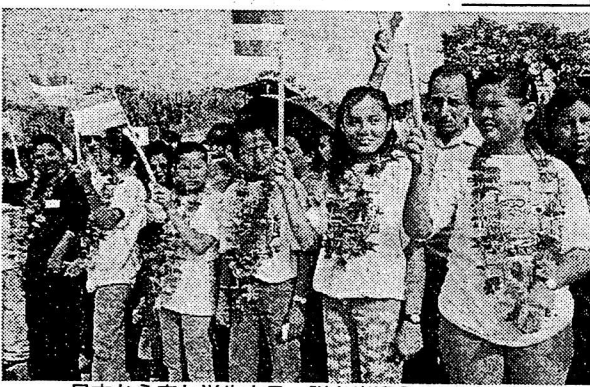
中学まで移住地内の学校で過ごし、高校からサンタクルスに出てボリビア人と机を並べた。2年目の68年、移住地の東を流れるグランデ川が大はんらんした。土地を大幅に買い増した年で、コメの収穫直前の出来事だった。フタや二ツトリなどの家畜もすべて流され、壊滅的な被害を受けた。

「教育は重要だ」と根間玄真さんを得た。日本人移民から口づせのように言っていた父親だったが、この時ばかりは学業を中断せざるを得なかった。それを学校へ伝え、それを学校へ伝え、

91年、サンタクルス市中央日本人会の会長に選ばれる。戦後、移民が再開されて37年が過ぎていた。世代交代が進み、戦後移民の子供たちもボリビア社会に根を下ろす中で、日本人会はかつてのような求心力を失っていた。会を活性化するため、日本語のみで開いていた総会にスペイン語を併用する

進む世代交代

「心」を継承 社会に貢献



日本から来た学生カヌー隊を出迎える日系4世の若者たち。この日のために日系人会青年部を発足させた＝リベラルタで、佐藤泰則写真

【サンタクルスで大槻 英二】

「日本人の心誠実さ、人間的な誇りが、ボリビア社会に貢献することが出来る。この国にも人おのれか、といういい面があります。二つの祖国のいい面を取り入れていけばいい」。根間さんは指摘する。

そんな日本人の心を継承する「日系国際校」を開くのが夢だ。

移住100周年の記念行事の狙いは、日系社会そのものの組織強化にある。たまたま戦前の1世が残した土地のあったリベラルタには今年、日本の援助で新しい日系人会館が建ち、日本語教室が再開された。日本への出稼ぎも、日系人としてのアイデンティティーの再認識につながっている。

「日本人の心誠実さ、人間的な誇りが、ボリビア社会に貢献することが出来る。この国にも人おのれか、といういい面があります。二つの祖国のいい面を取り入れていけばいい」。根間さんは指摘する。

リレーコラム

書きたい放題



大槻英二記者

△ △

南米ポリビアへ日本人が移住して100年たつと聞き、8月に現地へ飛んだ。最初に目指したのは、ブラジルと国境を接するポリビア北部のコピハ。ポリビア移民は、ペルーに渡った移民が天然ゴムブームにわくアマゾンの森に新天地を求める形で始まる。その動脈となったのが、アマゾン川源流の一つ、マードレ・デ・ディオス川。コピハはその入り口にあたるバンド県の県都だ。

赤茶けた砂ぼこりが舞う灼熱の大地。砂が飛び込むのを避けるため、冷房の利かないタクシーは窓を開け切つて走る。

地図を開くと、コピハ郊外に「Tokio」「Yokohama」「Mukden（奉天）」という地名が刻まれている。ゴム採集のため森に入つた日本人が懐かしんで命名したものであろう。しかし、1世の時代ははるか、ポリビア社会に同化した2、3世から移民史をたどる旅は難航した。

地球の裏側で触れた「日本」

です」とやんわり遮られた。自分のことより、人を立てる。その言動自体に日本人的な美德を感じた。

50年も離れていないアイスクリム店に案内された。コピハの日系社会が生んだ成功者、エルネスト・ニシカワ氏の家だ。彼は1980年に57歳で亡くなっているが、妻エレナさん(70)は健在だった。

コピハ日系人会の副会長、マリア・シオザキさん(66)を訪ねた。中央広場の近くで小さな裁縫用品店を営んでいた。ガラス戸の棚から、大切に保管していた父親の戸籍の写しが出てきた。「本籍・熊本県本渡市佐伊津町、氏名・塩崎時松」とある。

父親の思い出を詳しく聞こうとしたら、「ここに来たら、ニシカワ家に敬意を表すべき

店の2階の調度品がそろった居間に通された。3世にあたる長女マリアさん(54)も米国のフロリダから里帰りしていた。

エルネストの父、西川興三郎氏は1908年ペルーへ渡り、13年ポリビアに入った。洋服仕立店や雑貨店を営みながら、息子はポリビア最大の都市ラパスに送り、十分な教育を受けさせた。

息子も父の期待に応える。大学で会計学を学び、軍隊在籍時にはベニヤランダ大統領(当時)から特別表彰を受けた。ラパスの小森商店に勤めていた時、エレナさんと知り合った。コピハ市長、バンド県知事、そして代議士と政治家として出世。辺境の町にスポーツ施設や映画館を造り、「バンド県の父」と呼ばれた。

だ」

ニシカワ家の居間には2枚の油絵が掲げられている。ゴム採集作業を描いたものと教室の授業風景。1世は「労働」に明け暮れ、2世の「教育」に力を注いだ。そして今は3、4世の時代を迎えている。十分な教育を受けられず、苦難の生涯を送った日系人も数知れない。しかし、彼らは日本人の血が流れていることに誇りを感じていた。

シオザキさんも父の口ぐせが印象に残っている。

「竹のようにまっすぐな人間になれ。この国のすべての人から尊敬される人間になれ」

地球の裏側で、現在の日本社会では忘れ去られてしまった「日本人らしさ」に触れた思いだった。

◇◇

次回の担当は川口裕之記者です。

豊かな森に囲まれて親子（右が母、左の2匹は息子）でのんびりと毛づくろいするオマキサル＝コロンビアのマカレナ熱帯雨林で



会社の 縮図？

が、この群れに入って間もない彼は、ついつい野生のものに手が伸びる。2回目も、迷った末にココヤシを選ぶ。3回目、今度はココヤシとクラッカーの両方を取った。4回目になって、クラッカーだけをむさぼり食べた。

鋭い日差しが照りつ

けたと思ったり、途端にスコールがたたきつける。雨明けのジャングルは天気が激変する。南米コロンビア中央部の「マカレナ熱帯雨林」。アンデス山脈の東、オリノコ、アマゾン両水系の源流域に広がる30

ガサ、ガサッ。伊沢教授の調査拠点「チャムサキャン」で迎えた初めての朝、東側の木々が突然、揺れた。餌付けしているオマキサルの一群だ。伊沢教授が「ホウ、ホウ」と呼びかけると、サルたちも樹上で応える。この1月の個体識別では、群れは16匹。メモと照合しながら出席を取る、10匹が確認できた。

「ナンバー」といって

マカレナの森で
●南米アマゾン日誌

えさ場にクラッカー、ココヤシ、バナナを並べる。中央の木に陣取ったオスのナンバー、セザールが下りてきてココヤシを取った。いつもえさを真っ先に取りに来る

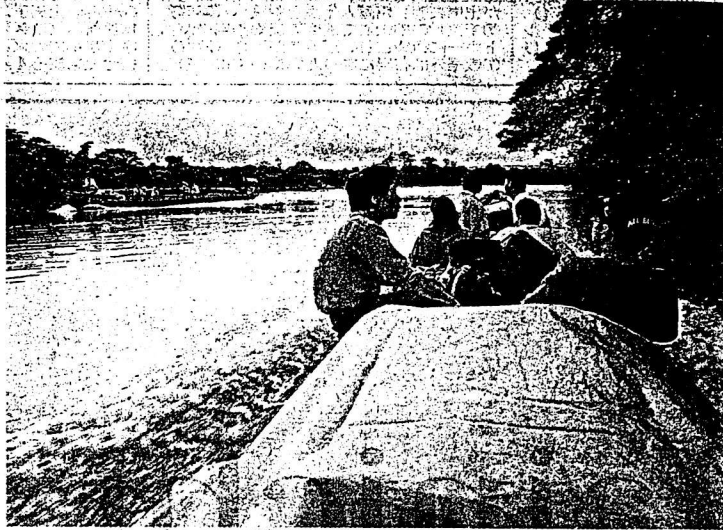
文 大槻 英二
写真 佐藤 泰則

万杉の原生林で、多様な生態系がみられることから「陸のガラパゴス島」と呼ばれる。この森で24年間、新世界（南米）サルの研究を続ける宮城教育大の伊沢純生教授（59）「豊後県立」とともに、大自然に生きる動物植物に会いに行った。



マカレナ熱帯雨林

シブジャペロ川を行くカヌー。途中で地元の人たちとすれちがう。



交通手段はカヌーだけ

アマソンの源域、マカ
レナ熱帯雨林にある官設教
育大の伊沢松生教授(59)の
調査拠点「チャムサキャン
プ」秘境にあって、「サ
ルの楽園」までの道のりは
遠い。

マカレナの森で

●南米アマゾン日誌

標高2600mのコロン
ビアの首都サンタフェデホ
ゴタから、フロベラ機を2
機乗の艦で、マカレナ市の
草原の滑走路に。二日酔い
のような高山病の症状から
解放され、熱帯特有の湿気
を迎えられた。ここから、
ルートは川だ。グアジ
ャペロ川、さらに支流のド
ウダ川へと約70km。交通手
段は船外機付きカヌーしか
ない。体長4mのメカネカ
イマン(ワニ)に見送られ、
蛇行するコーヒ色の川を
ひたすら進む。
日が沈み、暗闇のスクー
ル。入植者の家で一泊し、
キャンプにたどり着いたの
は日本を出てから三日目の真夜

つた。
文 大槻 英二
写真 佐藤 泰則



キャンプのキャンプは釣り上げたピラニアを調理して食べている。コロンビアのマカレナ熱帯雨林で

マカレナの森で

●南米アマゾン日誌

8/28

ピラニア食べて力持ち？

「釣りに行く」。コロ
ンビア・マカレナ熱帯雨林
にあるサル研究の拠点「チ
ャムサキャンプ」で、調査
月曜があった。長さ10cmも
あるカマリのような針の小
コさん(46)に誘われた。
魚を釣り、直径0.8cmの
キャンブ前のドウダ川が
太い糸垂らす。

30分ほどで、鋭い歯を
き出したピラニアが掛
かった。体長4cm、かみか
み食卓を飾った。「あいつが
力持ちになったのはピラニ
アを食べたからだ。そん
なジョークが飛び交うほ
どここでは欠かさないた
んぱく源なのだ。」
文 大槻 英二
写真 佐藤 泰則

「こっちの木の上にいますよ」。森の中から、稲葉あぐみさん(28)の声が聞こえてきた。神戸学院大の院生。コロンビア・マカレナ熱帯雨林にある「チャムサキャンプ」で今年2月からクモザルの調査を続けている。「下唇が出ていてちょっと不細工ですけど、あれがオスのオコです」

クモザルの女性研究者

8/30

待つ。移動したら、観察路を手で結んで、手持ちのメスを外してどこまでも追う。の橋渡しをするフリッジ行動を見た時は感動しました」と稲葉さん。森の生活は来年1月まで続く。

文 大槻 英二
写真 佐藤 泰則

長い尾と腕を巧みに使って木々の間を渡りながら、てのひらを広げたような形の葉を持つセクロピアの茎や果実をかじっている。

午前6時過ぎ、クモザルは「オウ、オウ、オウ」と声をあげ、一緒に行動したい相手に呼び掛ける。その叫びを頼りに、稲葉さんは居場所を突き止め、どのサルがいつ、どこで何をしたかを書き留めていく。昼寝を始めれば、木の下でじっと

マカレナの森で

● 南米アマゾン日誌



稲葉さんが追いかけるクモザル。セクロピアの実を食べるコロンビアのマカレナ熱帯雨林で

巨大なヘリコニアの森を抜けて、研究者たちはチャムサキ
キャンプを目指す＝コロンビアのマカレナ熱帯雨林で



つるがからまった樹木が
うっそうと茂り、そのなか
ら突然、猛獣が現れる――。
ジャングルと聞いてイメージするの
は、そんな映画「ター
ザン」のような
世界だろうか。
コロンビア・マ
カレナ熱帯雨林に
あるサル研究の拠
点「チャムサキ
キャンプ」の周辺は、
クワ科やマメ科の
巨木の樹冠が頭上
を覆い、昼間でも
薄暗い。しかし、
下草が育ちにけい
ので、意外と歩き
やすい。
森の中で、いかにもジャ
ングルといった雰囲気を感じ
し出しているのは、クマレ、
ミルペンと呼ばれるヤシの

サル研究の森歩く

木、それに赤と黄の花が鮮
やかな何種類ものヘリコニ
アだ。バナナに似た大きな
葉が、南国っぽい。
一見、日本のものとそっ
くりの竹林もある。しかし、
よく観察すると、有刺鉄線
のような鋭いトゲをもった
枝が横に伸びている。何人
もの日本人研究者が、タケ
ノコの料理に挑戦したが、ア
クが強くて食べられなかった
そうだった。文 大槻 英二
写真 佐藤 泰則

**マカレナの
森で**

● 南米アマゾン日誌

キャンプの人にもすっかりなれ、毎日のように遊びに来る
ホウカンチョウの一家—コロンビアのマカレナ熱帯雨林で



マカレナの森で

● 南米アマゾン日誌

野生動物の楽園といつても、ジャングルの中でお目当の動物を探すのは意外と難しい。かと思つて、向こうの方から、ひょっこり遊びに来ることもある。

人なつこい訪問者

双眼鏡をのぞくと、黒い体にオレンジのくちばしが鮮やかな鳥が4羽、ちょこちょこ歩いている。ホウカンチョウだ。トサカがあり、ニワトリより一回り大きい。ほとんど飛べないことから乱獲され、絶滅の危機にひんしている。

ロス・アンデス大(コロンビア)出身で現在は米ミズーリ大院生、イワン・ヒメノスさん(30)らのグループが、この森で2つがいのホウカンチョウの採食行動を調査している。

落ちてゐる木の実やミミズ、ヘビを捕まえて食べるという。

羽ひで近づくと、4羽の「訪問客」は、また「プイ、プイ」とつあきながら森の中に消えた。

文 大槻 英二
写真 佐藤 泰則

多様な動物たちの営みを包み込むマカレナの熱帯雨林。右奥はドゥダ川＝コロンビアで



マカレナの森で

●南米アマゾン日誌

この森が、開発の危機にさらされたことがある。1986年、縦断道路の建設計画が浮上したのだ。宮城教育大の伊沢紘生教授(59)らが「陸のガラパゴス島・マカレナ地域を守る基金」を設立し、日本からの募金で開

自然に学ぶ

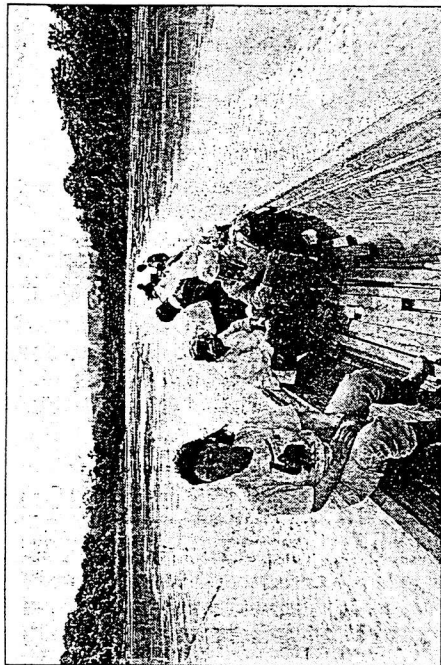
コロンビアのマカレナ熱帯雨林には、30万坪の手つかずの大自然が残る。森を一望できる展望台に立って深呼吸すると、できたの酸素の濃さを実感する。

「子供たちがじかに熱帯雨林を体験することが、将来にわたる保護につながる」(伊沢教授)。93年には熱帯雨林学習センターが建設され、教員の研修やドゥダ川などの流域の子供たちの自然観察の場として使われている。

伊沢教授とともに研究活動を進めるロス・アンデス大(コロンビア)のカルロス・メヒア教授(56)「生物学」は「流域の入植者たちは今でも道路がほしいと考えているだろう。しかし、それ以外のコロンビア人はこの森を守りたいと思っている」と話す。熱帯雨林の貴重さを次代に伝える地道な努力が求められている。

発予定地を買い取った。計画は中止された。

文 大槻 英二
写真 佐藤 泰則



ドゥダ川のほとりチャムサマキャンプへ向かう宿営者
ら(左)ら、頭巾チームと地元の人たちを乗せたカヌー

動物のリズムに合わせて



ドゥダ川の川岸に姿を現したメカネカインマンは、人間が近づいても悠然としている

メカネカインマンの姿、時を動かす。メカネカインマンの姿、時を動かす。メカネカインマンの姿、時を動かす。

メカネカインマンの姿、時を動かす。メカネカインマンの姿、時を動かす。メカネカインマンの姿、時を動かす。

メカネカインマンの姿、時を動かす。メカネカインマンの姿、時を動かす。メカネカインマンの姿、時を動かす。

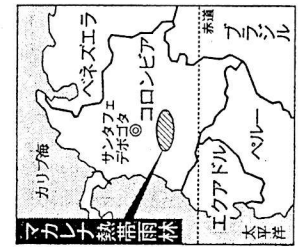
メカネカインマンの姿、時を動かす。メカネカインマンの姿、時を動かす。メカネカインマンの姿、時を動かす。

メカネカインマンの姿、時を動かす。メカネカインマンの姿、時を動かす。メカネカインマンの姿、時を動かす。

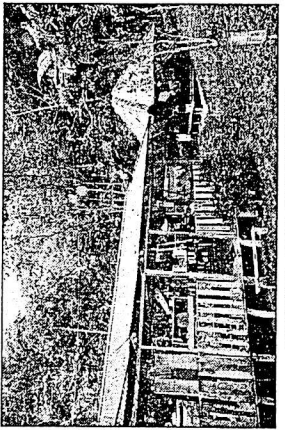
野生の時をアザンの本 eye



メカネカインマンの姿、時を動かす。メカネカインマンの姿、時を動かす。メカネカインマンの姿、時を動かす。



マカレナ熱帯雨林は、コロンビアとペルーの国境に位置する。この地域には、ジャングル、川、そして野生動物の豊かな生態系がある。マカレナ熱帯雨林は、コロンビアとペルーの国境に位置する。この地域には、ジャングル、川、そして野生動物の豊かな生態系がある。



コロンビア・マカレナ熱帯雨林にある
サル研究の拠点「チャムサマキャンプ」

◆新世界ザルの楽園◆
マカレナ熱帯雨林にある「チャムサマキャンプ」の周辺は、7種類の新世界ザルが生息する「ザルの楽園」だ。最も身近に目られるのは、顔(左)付けたフタザルである。毎朝、夕方、カニザルは、7種類の新世界ザルをねだりにくる子ザルたちのそばまで近づき、しつぱを手のように巧みに使って枝を渡る。メカネカインマンは、人間が近づいても悠然としている

ホエザルだ。メカネカインマンは、メカネカインマンと一緒に暮らす。メカネカインマンは、メカネカインマンと一緒に暮らす。メカネカインマンは、メカネカインマンと一緒に暮らす。

ヨザルも日常的に見られる。ヨザルも日常的に見られる。ヨザルも日常的に見られる。ヨザルも日常的に見られる。

2000年・横浜市立大学探検探査の会総会 議事録

日 時：2000年4月22日(土) 15時～

会 場：いせやま会館

議事次第

1. 出席者紹介

- ・高井主税、穂積拓夫、佐々木仁、川尻哲夫、田村康一、小森享二、高松康夫、河合武臣、佐藤修史、小林剛、室小野花（現役4年）、佐藤明（現役3年）、熊原武博（現役4年）の計13名

2. 会計報告

- ・会計担当佐々木より。詳細は別紙会計報告参照。
- ・過年度の徴収記録が正確でないため、2重に会費を支払っているケースがあるとの指摘を受けた。思い当たる方は会計担当佐々木まで、ご連絡ください。

3. 会報、40周年記念文集の作成について

- ・会報は新たに現役に原稿依頼を行った。
- ・40周年記念集は今年の11月までに作成する。新規に原稿依頼する。

4. 活動報告

- ・ボリビア遠征は報告書にまとめ、学長賞をゲットした。
- ・昨年度はボリビア遠征以外は低調で、夏合宿に予定していた無人島も中止した。
- ・学際は酒類の販売が禁止になった。
- ・現役は2、3年生が4名と少なく、今年度の部長が休学するなど弱体化が懸念されている。最近の学生は部活等の学内集団行動を嫌う傾向にあり、新入部員の確保も難しい状況。

5. 活動計画

- ・特になし。穂積拓夫より、メキシコ遠征の誘い。

6. その他

- ・総会終了後の懇親会には、平塚洋介（1994年入学）、中村淳一（現役4年）が合流。

1999年度 探検探査の会 会計収支報告

(1999年4月1日～2000年3月31日)

a) 収 入		(単位:円)
◆ 会 費 収 入	-----	78,000
◆ 利 息	-----	204
◆ 小 計	-----	78,204

b) 支 出		
◆ 郵 送 代	-----	21,360
◆ 文 具	-----	2,625
◆ 会 議 費	-----	2,625
◆ 会 報 製 本 費	-----	39,060
◆ ポリビア隊壮行会補助	-----	32,000
◆ そ の 他	-----	262
◆ 小 計	-----	97,932


c) 単 年 度 収 支 ----- -19,728
(= a - b)

d) 前 年 度 繰 越 金 ----- 204,561

e) 収 支 計 ----- 184,833
(= c + d) (翌年度へ繰り越し)

1999年度 会計監査の結果、特段の指摘事項はありません

2000年4月20日

鈴木 広視 

会員近況紹介

伊藤 源（1989年入学、アメリカ在住）

ファーストネームが GENTA から GARY になりました。重みがある名前です。つくりきません。（でもまあ、ビジネスネームなのでいいでしょう。）

4/23 にとうとう終わりました。終わってしまいました。結婚式ってつかれますねえ～。

小森 享二（1968年入学）

昨年、満 50 歳になったのを記念して、妻と二人だけでハワイ旅行を楽しみました。ハワイ島とオアフ島の二島でマウナケア火山での天体観測、乗馬、スキューバダイビング、パラセール、ジェットスキー、ヘリコプター観光、スキンドайビング、島内バス観光と目一杯いろいろなことにチャレンジしました。

この旅行をきっかけに昨年 11 月から妻と二人で本格的にスキューバダイビングを始めました。月一回のペースで潜っています。

荻野 諭（1996年入学）

4月に就職しまして、長野県の牧尾ダムという所で用地買収の仕事をしています。こちらはまだ寒く、夜は0度を切ることも珍しくないということで、ダウンジャケットをまだ着ています。

桜もまだ開花しておらず、4月末くらいに咲く予定で、今年3回目の花見を楽しみにしています。

御岳や木曽駒ヶ岳も近いので、是非その折にはお立寄りください。

星川 亮（1994年入学）

職につけずにフリーターをやっております。

熊沢 憲（1981年入学）

引っ越しました。4月からは主としてジャカルタと成都で仕事する予定です。

佐々木 鉄明（1982年入学）

勤めている会社が潰れそうです。ここ5、6年は観光でマレーシア、インドネシアの熱帯雨林の動植物を見にいらしています。

35歳をさかいに人生守りに回ってしまったことを実感する今日このごろです。

伊吾田 宏正（1992年入学）

3月で東大の修士課程を終え、4月からは北海道大学農学部演習林の博士課程に所属します。

研究はこれまでのエゾシカの季節移動を継続して追跡していきます。所属は変わっても、白糠のフィールドへ毎日通う生活スタイルは変わりません。

師井 佳子（1982年入学）

高所恐怖症で飛行機×、吊り橋×、瀬戸大橋を車で渡る時も左側車線がコワくて隣の車線をまたいで運転していた主人がハイキングに行く気になったので、GWは久々にとっても低い山に行くつもりです。

結婚する前に「お願いだから登山はやめてくれ」と頼まれて以来、ホントに久しぶりに足慣らしから始めるつもりで、楽しみにしています。

小森 啓志（1990年入学）

引っ越しました！総務兼任の役得を生かしてオシャレな8階建てマンションを寮として借りて、いちばんいい部屋に陣どっています。ベイブリッジやランドマークタワーが丸見えです。注）反町公園はホモのたまり場なので要注意です。

菅井 智昭（1994年入学）

今春卒業しまして、新潟大学で博士課程に進学します。

宮崎 捷二（1961年入学）

今夏は高校登山部顧問の有志とキリマンジャロ登山と自然公園観察の予定でいます。今までの遠征（インドヒマラヤなど）と違って観光旅行的ですが、5,900mの高さ故甘くはみていません。

1ヶ月100kmを超える様にコツコツ走ってます。

高梨 洋之（1985年入学）

3月の定期異動で広島県呉市の勤務となりました。今度の配置は経理部契約係長ということで、なにかと注目されるので新聞等を賑わせることがないようにしたいと思います。

佐藤 修史（1987年入学）

大変残念ですが、当日は仙台に出張しています。またの機会を楽しみにしています。

浅香 辰也（1983年入学）

事情により今回も欠席させていただきます。ご盛會を祈念しております。

小島 広海（1970年入学）

4月22日（土）は残念ながら、仕事のため欠席させていただきます。皆様に宜しくお伝えください。

松林 孝憲（1993年入学）

仕事のため出席できません。何かおもしろい企画があれば是非……。最近私自身マンネリ化してきた??ので……。

河合 武臣（1961年入学）

私もいよいよあと1年後に年金生活をむかえる年になりました。この1年を自然に、日々を味わいながら過ごしていきたいと思っています。

気は若いつもりですが、スポーツをして少し無理をして肘を痛めてしまいました。筋トレなどして積極的に治そうと頑張っています。

さて、日本の政治は私の身体よりひどいようです。銀行の不始末やゼネコンのもうけのため大金を注ぎ、国民生活には冷たいを通りすぎ、はぎ取り強盗行為。私は年金を減らされ、若い人は5年間とり上げられました。選挙でかたきうちよりないようですね！

野口 道章（1977年入学）

昨年6月に左足首を骨折し、夏シーズンから秋にかけて計画の登山や旅行がすべてダメになり1年間全く運動もできませんでした。おかげで4kgも太り、身体が重くて困っています。今年もいよいよシーズン到来で何かチャレンジしたいと思っている今日この頃です。

何か短期で参加できる企画があればやりたいです。みな様によろしく。

児玉 亮（1990年入学）

連絡が遅くなってすみません。仕事で出席できませんが皆様によろしくお伝えください。

このほか、川尻哲夫さん、三浦研さん、小林剛さん、本多秀雄さん、高井主税さんから出欠ハガキ頂きました。

編 集 後 記

8号をお届けします。編集が遅くなってしまいお詫びいたします。

今回は、学生部を中心とするボリビア日本人移住100周年記念探検隊に関する記事が多くなりました。学生部の報告記事は報告書から転載させていただきました。また、現地を取材した大槻氏のボリビア報告記事は、貴重なもので資料提供していただき誠にありがとうございました。アマゾン日誌ともどもぜひお読みください。

会員みなさんも何かと忙しい日々を過ごしていることでしょう。そして、それぞれの場で元気でがんばっていることでしょう。この冊子を親睦交流の場に役立ててください。

それでは、ますますのご活躍を祈って・・・・

探検・探査 第8号

発行年月日 2000年7月

発行者 横浜市立大学探検・探査の会

代 表 大野正夫

編 集 探検・探査の会編集委員会

祝！4000h i t

幹事長小森氏、chico三浦氏降臨中！
小嶋健太もブラジルから参戦中！

探検部羅針盤へようこそ

あなたは**04000**番目のお客様です



<http://www.gld.mmtr.or.jp/~miura-kr/>